

【グラビア】

# Fresh Concert CMDJ 2014

2014年4月10日（木）すみだトリフォニーホール（小）



開演前に撮影した演奏者に理事長、司会者と実行委員長が加わった記念写真



挨拶する北川理事長



① サクソフォーン四重奏



司会：西山淑子



②池田史花(ソプラノ)



③落合真悟(チェロ)



④宮城島康(バリトン)



⑤稲垣有芽乃(ピアノ)



⑥ピアノ四重奏(Vln. Vla, Vc. Pf.)



⑦中川香里(M-Sop.)



⑧山本有紗(ピアノ)



⑨宮地江奈(ソプラノ)



⑩三木佑真(テノール)



インタビュー  
司会者/中川香里

《伴奏者》 その他



伊藤眞祐子 ②



井出久美子 ③



金森大 ④



松田 伶 ⑦



藤川志保 ⑨、⑩



開演前の練習風景-1



開演前の練習風景-2

撮影：高島和義 (一部：中島洋一)

# 音楽の世界

## 目次

<b>ゲラビア</b> Fresh Concert CMDJ2014		2
<b>論壇</b> 生活のデザイン	清水 康子	4
<b>特集</b> ピアノ音楽		
ローベルト・シューマンの初期のピアノ音楽	東浦 亜希子	6
私とピアノ曲	助川 敏弥	10
近代文化はどのように形成されていったのか ～パデレフスキの演奏活動を例として～	湯浅 玲子	14
<b>リレー連載</b> 未来の音楽人へ(14) ～範例のない音楽分野へのチャレンジ～	阿方 俊	20
“compositions” と私の 24 年 ～新作エレクトーンコンサート “Compositions2014” 開催に因んで～	菊地 雅春	24
<b>連載</b>		
歌の道・我が音楽人生(5)	久住 祐実男	26
音・雑記一ひなの里通信(68)	狭間 壮	28
名曲喫茶の片隅から(49)	宮本 英世	30
音盤奇譚(54)	板倉 重雄	32
人・アート・思考塾(3)	小西 徹郎	34
<b>コンサート・レポート</b> Fresh Concert CMDJ2014	実行委員長	36
(公社) 日本尺八連盟が伊勢神宮で式年遷宮奉納演奏	高橋 雅光	39
日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内	高橋 雅光	40
コンサート・プログラム <b>【ピアノ部会 華麗なる響宴 2014】</b>		44
CMDJ 会と会員の情報		52
		3

音楽大学で文学とフランス語を教えて三十数年を過ごし、この3月に定年を迎え授業と学務から解放されて改めて思うことは、組織の中で守られ育てられた自分の毎日の生活の有難さと、非常勤講師を始める前の大学院生時代に戻ったような自由な人生の広がりです。大学の教職員は定年も含めて転職や離職で組織を離れ、学生は卒業・修了で大学を離れ、新しい世界に乗り出していくわけですから、そこから自分の人生・生活をどのように構築していくか、人の数だけその解答があり、しかも絶えず書き換えられていくものとしてそれがあるわけです。「自分探し」は若い人から年齢を重ねた人まで日々続く人生そのものともいえます。

授業ではフランス文学やギリシア・ローマ古典文学をとおして、「人間とは何か、社会とは何か」そして「自分とは何か」を考えてほしいと語ってきました。文学は「ことば」を表現手段とするものですから、フランス語教育も広い意味ではそこにつながります。異なる言語を学ぶことで世界を知り自分を知るきっかけができるのです。文学をどんな時代のももの作品そのものとして読むことは大切ですが、どうい時代の中でそれが育まれたかを歴史的文化的脈絡の中で理解することも大切です。しかしわれわれの生きる時代が作品の生まれた時代とあまりにもかけ離れていて、理解が難しそうな場合もあります。そうかと思えば現代史の現場で大きな変化があって、かつてはあり得ないと思っていた事が現実味を帯びて感じられるようになることもあります。私が体験した三つの例をあげましょう。

18世紀フランス摂政時代に生まれた『マノン・レスコー』のヒロイン像は日本的「良妻賢母」の伝統意識のなかでは理解し難かったのに、1980年代から1990年代にかけての大きな変化で、容易に理解可能となりました。中世末期の『結婚15の楽しみ』もそうです。他の二例は、21世紀の大事件「9.11」と大災害「3.11」が関わります。11世紀の十字軍の時代に成立した『ロランの歌』には、8世紀のイスラム教徒とキリスト教徒の対立の構図が反映しているのですが、これには少し中世の歴史的な理解が必要でした。ですから時代が一千年逆戻りしたかのような「9.11」後のブッシュ大統領の演説には驚きました。戦争の20世紀から自由になり21世紀には明るい未来がひらけているような気分が蔓延していた2001年9月に刻印された衝撃的事件の記憶です。ありえないはずの事象のもうひとつは「3.11」の大震災津波の記憶です。16世紀フランスの抒情詩人モーリス・セーヴが、自分の愛の確かさ堅固さを歌うのに、リヨンの地勢上ありえない天変地異を引き合いにだしているのですが、優れた表現技法の一例が「3.11」の後には『デリー』第17番を読むたびに、大災害の厳しい現実に戻されることになりました。

現実といえば音大卒業生の皆さんの選ぶ道も時代の変化に応じてさまざまに変わってきました。かつてピアノ演奏一筋の熱心な学生さんが、「二十歳から国民年金の保険料を払っているけれど、卒業したら自分で払いなさいと母に言われているので、頑張らなくては…」と当然のように言うのを聞いて、驚き感心したことがあります。80年代の終わりごろでした。結婚前も結婚後もピアノを教える仕事と合唱の伴奏などを続けて、今では上の子は大学生、彼女はずっとピアノと共に暮らしています。奨学金をもらいたいけれど卒業後の借金になってしまうのでもらわないで頑張ります、と言う人は何人かいましたが、国民年金の話題は彼女だけ。私自身自分の年金のことを何も知らずに今に至ったので、あらためて彼女を見直しました。彼女の親は美術系アーティストなので、自由業を生きることがどういうことかわかっていたのでしょう。経験者の一言には有難い重みがあります。

教職につくか一般企業に就職するかで定職を持つ決心を固めてそれを実現できる人はともかく、音楽の特技を生かして社会に貢献し生活の糧を得る方法は本人の努力次第でいろいろな可能性があるとはいっても、それを意欲的にやり続けることは簡単ではないでしょう。外国留学や大学院に進学して猶予と豊かな時間を得てもその後に進むべき道の探求は本人次第です。自由の道を生きるには、自分の音楽への思いの強さを他者や社会との関係の中で共有していく喜びにして現実のものにできるかどうかは問題です。それには時代の変化を敏感に察知しなくてはなりません。一人でやる場合も協力者に頼る場合も、企画から広報宣伝、演奏会やイベントの実施、来場者への対応・感謝など、人間が好きでコミュニケーションが楽しくないと大変そうです。留学してピアノ伴奏法修士を終えてきたある卒業生は明るく前向き、東京の音楽教室で働き、幼児向けプログラムにも取り組み、月一回は故郷に帰り、伴奏や各種コンサート、病院などへのヴォランティア出前演奏を欠かしません。この生き方にも感心しました。

また、少子化の時代になった現代の音楽教室では中高年の初心者と演奏再開者への指導法が重要になりそうですし、かつては結婚式が中心だった歌と演奏が、このごろは法事やお葬式にその大切な役割を求められているようでもあります。そして、格調高いクラシックのコンサートをやる場合でも、プログラムの組み方、曲目の選び方、演奏順など、演奏者の人柄と芸術性がより際立つと聴衆を魅了して、音楽の喜びが共有されるのです。心に残る感動は明日への力を与えてくれます。

私たちには自分の人生・生活を自分なりにデザインし、組み立て構築することが、自由に生きる日々の営みの中に求められているのです。素晴らしい人生のデザインをされている皆さんを見習おうと心に決めた私は、今わくわくしています。

(しみず・やすこ：国立音楽大学名誉教授)

## ローベルト・シューマンの初期のピアノ音楽

ピアノ：東浦 亜希子

## 音楽外的なものとの関連

シューマンは1840年までに作品1～32のピアノ曲を集中的に生み出しています。これらの初期ピアノ作品はとりわけアイデアに満ち、多様な音楽外的インスピレーションを内包していて、謎解きのような魅力があります。たとえば、《アベッグ変奏曲》作品1や《謝肉祭》作品9は、特定の名や語を音に置き換える「音名象徴」の手法が作品形成の観点として取り入れられています。あるいは、様々な楽曲のモチーフの引用によって作品間の内的つながりが示唆されるものや、音楽に付された文学的な言葉や標題の示すもの、またシューマンの言説といった作品解釈の手掛かりも、その暗示するものの程度をめぐって議論が交わされてきました。

ロマン派の時代において、音楽と文学は密接な関係をもっています。中でも、幼いころより文学への多大な関心と才能を持ち、詩人になるべきか音楽家になるべきかの間で、長い間決断することができなかつたと伝えられるシューマンにとっては、音楽作品のうちにそれら二つの領域区分を凌駕し、融合するものを実現することが課題であったと思われます。アンドレ・ジッドは「シューマンは詩人で、ショパンはアーティストである。両者は全く異なっている[A. Gide, *Notes sur Chopin* (Paris : Arche, 1983), pp. 15-16.]」と述べていますが、常に比較されるように、表現したい音楽を音響世界の中に実現させたショパンに対し、シューマンの場合は、それにとどまらない音楽外の構想が潜められています。私達がシューマンの作品を演奏する際に、彼の愛読したジャン・パウルやE. T. A. ホフマンらの著作に触れ、相互の雰囲気類似性を捉えることによって、音楽世界のイメージを膨らませていくことができるのは、シューマンの音楽がこれら文学作品の内的なものに接近していることの証明といえるでしょう。

## ジャン・パウルへの熱中

音楽以上に文学の果たす役割が大きかったツヴィッカウでの少年時代、シューマンは、書籍商を営む父アウグストの影響で様々な文学の領域を涉猟し、広範な教養を身につけ、中でも父も好んだジャン・パウルに傾倒しました。シューマンがジャン・パウルの著作を愛読し、その思想を吸収し、その影響の中で創作を進めたことは広く知られています。ジャン・パウルの小説における二重自我の観念は、シューマンのペンネームとして現れるフロレスタンとオイゼビウスの構想の源泉となりました。そしてその傾倒ぶりは、1827年から1838年までの日記第1巻におけるジャ

ン・パウルについての記述が、シューベルトやベートーヴェンと同じほど見られることから窺えます。

ジャン・パウルの小説は常にシューマンにとって詩的な世界を呼び覚ますものでした。彼の小説『生意気盛り』の作中で、主人公の一人ヴァルトの詠む一節の詩「僕が星であったなら・・・」に付けられたヴィーデバインの歌曲〈ヴィーナに〉に共鳴したシューマンは、日記に次のように綴っています。

〈ジャン・パウルの——「僕が星であったなら・・・」の中には、ジャン・パウルのすべてのポエジーが憩っている。星—薔薇(花)—音色—夢—愛が。[日記第1巻, 105頁, 1828年8月13日]〉



ジャン・パウル (Jean Paul) 1763-1825

ヴィーデバインに宛てた手紙を読み解くと、シューマンは、この歌曲がジャン・パウルの霊妙な言葉を音楽で包むことによって、その精神を明るみに出すことに成功していると感銘を受けていたようです。言いかえれば、ヴィーデバインの音楽を通して、よりジャン・パウルに接近する道を見出しているともいえるでしょう。

さらにシューマンは、この『生意気盛り』の一節に非常に共感していたようで、これに先立つ1828年6月に、自作の一篇の詩に「僕が星であったなら」、「彼女のために照らしたい」、「僕が薔薇であったなら、彼女のために咲きたい」という詩の部分を取り込んでいます。これはジャン・パウルの造語に従い「多韻律 (ポリメーター)」と題

され、当時シューマンが慕っていたアグネス・カールスの6月5日の誕生日にあたり書き送られたものです。

〈ある美しき6月の夜、ひとりの若者が、もの言わず、思いにあふれ、春爛漫のなかを歩いて行った。花々はおだやかにまどろみ、迷える一羽のナイチンゲールが、ひびきと、まどろむ花とのある、妙なる夢のなかから出てきたごとくに飛びゆき、風に吹かれた蛾がいまだ黙してうちふるえ、まばゆい大理石の像

でバラのつぼみがゆれた。静かに眠る向こうの村で12時が鳴った。すると天の星々のあいだに響きがあり、その〈星〉が言った、「きょう彼女は生まれた、だから雲に彼女の心をくもらせてもらいたくない、星に夜どおし光っていてほしいのだ」——・・・（略）・・・若者は、喜びで満たされたように天と星々を見上げ、ただ悲しげに自らに言った。「僕が星であったなら、彼女のために照らしたい、僕が薔薇であったなら、彼女のために咲きたい・・・」。・・・（略）・・・[日記1巻、91頁]

ここには、ジャン・パウル風の雰囲気があるがそこはかたなく漂い、文体の模倣の試みというより、ジャン・パウルの小説との精神の共有が感じられます。シューマンが「ジャン・パウルのポエジー」と綴った「星」、「花」、「響き」、「夢」、「愛」といった語は、1827年からシューマンの日記や詩文においても散見される表現であり、ジャン・パウルの散文スタイルへの熱中もまた、この時期のシューマンの文体に明らかに映しだされています。

## ピアノ小品集《パピヨン》作品2

ところで、シューマンの音楽と文学との内的関連は指摘されつつも、シューマン自身が彼の楽曲と具体的な文学作品との関連性を明言しているのは1832年に出版された《パピヨン》作品2のみです。この作品は『生意気盛り』の「仮面舞踏会」の章との関連を持つ小品集です。W. ベティヒャーの研究によって、シューマンの所持した『生意気盛り』の本の中にシューマン自身が施した下線が《パピヨン》の曲の番号と一致することが発見されており、具体的な場面との関連が詳細に伝えられています。《パピヨン》の全体は序奏と12の舞曲から構成されていますが、ベティヒャーの伝えるところによれば、第10曲までが小説の場面に対応しています。

ただし、音楽素材は作品番号が付される以前の創作を取り込みながら構成されたことを振り返ると、文学的なイメージを契機として音楽が生まれていったのかは疑問が残ります。たとえば、「巨大な長靴」の場面と結びつけられた第3曲には、当時の師であるドルンの下での、対位法学習のカノンの習作が転用されていて、文学を音楽化したものとは考えにくいからです。第5曲、第11曲には、4手用の《8つのポロネーズ》の第7曲と第4曲がそれぞれ下地として転用されています。ポロネーズのリズムは、小説の登場人物、ポーランド将軍の娘ヴィーナをほのめかすように思われますが、これも果たしてテキストの文脈にポロネーズの転用を結びつけたのか、前後関係はわかっていません。

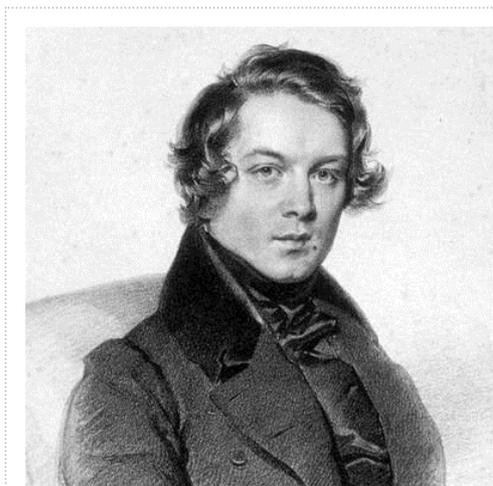
こうして個々の照応関係には疑問を残しつつも、文学的アプローチが作品の性格をきわめて豊かに伝えてくれるのも事実です。なかでも最も詩的なイメージを喚起するのは、終曲の第12曲です。それは自筆譜に書き添えられた『生意気盛り』の最

後の場面にヒントを得たのではないかと思わせるもので、だんだんと遠くに立ち去る弟ヴェルトを象徴するかのような音楽構成になっています。まずファンファーレ風に響くのは、起源を17世紀に遡る〈祖父踊り Grossvatertanz〉の民謡で、宴会のお開きを意味しています。その後第1曲の主題が回想され、それが時を告げる鐘の音とともにだんだんと遠くに消えていきます。

シューマンの初期ピアノ作品は、その成立当初から難解と受け止められてきました。《パピヨン》のような作品でとりわけ批判されたのは、文学的なものを背後に置いた作曲の仕方の読み解きにくさ、音楽の複雑さと細部の独自の扱い方でした。加えていえば、自然な構成を逸脱していることへの違和感は、様々な音楽を既に知っている現代の聴き手にとっても、いくらか当てはまる面があるかもしれません。

シューマン自身が、この作品について、〈変化があまりに目まぐるしく、色彩はあまりに変化に富んで、聴き手はまだ前のページが頭にあるというのに、一方演奏者はまもなく終わってしまう[日記1巻、407頁]〉

と日記に綴っています。《パピヨン》の構成は、いくつかの、主に独立した小さな部分が断片的に、並列的に、細密に組み立てられています。その調構造は、二長調の単一の枠組みからは大きく外れ、関係調によってもたらされる緊密な構築性を拒んでいるのですが、これは、思いがけない調の運びに基づいた脱線的な原理を映し出しています。それゆえ、序奏と第1曲、第11曲と第12曲が二長調で、中央の第6曲が二短調という構造上の枠組みをなす「開始—中央—末尾」の調的シンメトリーが、作品を特徴づけています。



若き日のシューマン（1830年）

この脱線的な原理においては、ある基盤を、別の新しいものが打ち消してしまうことで、有機的なつながりや、人が本来、自然なものと感じる流れを阻んでいます。こうした脱線的な創作手法への興味は、ジャン・パウルに通じるものでした。『生意気盛り』の精神世界に共鳴したシューマンは、音楽と文学の狭間で、湧き上がる文学的なイメージと創作手法の新しさの両面を課題として抱えていたと思われます。シューマンはその並列的な配列の無限の多様性と、一見すると恣意的にみえるほど複雑な絡み合いのなかに、斬新な音楽形式を実験していたと考えられます。

（ひがしうら・あきこ 音楽博士・本会 ピアノ会員）

## 私とピアノ曲

作曲 助川 敏弥

私の作品は、ある時期からピアノ曲に集中されるようになった。このいきさつについて、いまさらながら自分のこれまでの歩いてきた道を振り返って見たい。

作曲を始めた若い頃からこの状態であったわけではない。

私の最初の作品、普通にいうデビュー作品は、オーケストラのための「パッサカリア」であった。1954年、24歳の時である。その後、芸大の卒業作品は「弦楽四重奏曲」であった。この曲は後輩であったヴァイオリンの海野義雄君のメンバーによって学内ですぐれた演奏で初演された。海野君が卒業した後も、その「アカデミー弦楽四重奏団」によってしばしば再演された。ここまでの経過では、作品がピアノ曲に限定集中にされるゆかりは見あたらない。その後、現在にいたる経過は私自身にとっても明瞭と不明瞭、容易にとらえがたい人生経験と要因を多く含んで現在のあり方にいたっている。

### デビュー作からその後まで

最初の作品「パッサカリア」はオーケストレーションの未熟さがかなりのもので、学友であった山本直純君、岩城宏之君等、現場での練達の経験を持つ友人たちによる親身のアドバイスと討論によってなんとか演奏にたえるものにこぎつけた。この時の友情は、彼らに未来永劫感謝しても尽くせない。

そもそも私の性格は現場型ではない。机に向かって考える独善型である。それ故に現場の経験を何より必要とするオーケストラははじめから苦手であった。しかしこの点もその後の経過によって変った。当時、NHKの花輪一郎さんが大編成オーケストラによるポップス音楽の番組を担当していた。花輪さんは、すでに故人となられたが、この会の賛助会員でもあられた。大型オーケストラを使って、アメリカの、ムード音楽、映画音楽、などをレコードを聴きながら編曲する仕事を頂いた。卒業直後のことである。社会人としての最初の仕事であった。これは現場修行としては申し分ない勉強になった。二管編成、ときには三管編成の大オーケストラが、書いたばかりのスコアをすぐオトにしてくれる。当然ながら、はじめは出来が悪く不評だったが、やがて職人として一人前とほめられるようになった。また、放送劇の音楽もおびただしく受け持ったので、現場での楽器とオトの扱い方にはヘタとは

言われただけの技術を持つことになった。花輪さんの仕事は三年以上続いた。十分な時間である。

## それがなんでピアノ曲に専念することになったか

私は30歳にならんとする頃から作曲に行き詰まりを迎えていた。尊敬する外国の大家の世界に没入して無反省に自分ではそれを「作曲」と思い込んでいそしんでいたのが青春時代である。自分の本当のオトを見出さねばならない時が来ていた。それからは、沈黙の中での難行苦行の時期に入った。その中で、自分の音楽の形成に一番都合がよいのがピアノ曲であることに気がついた。ピアノ音楽はどんな編成の音楽も型としてとりこめる。つまり、音楽の「模型」、「ミニチュア」を作れる。オーケストレーションにはたくみになったが、人間本来の生まれながらの性格は幾つになっても底の方では変らないものらしい。この「模型」「ミニチュア」による音楽形成の思索、模索、に私は次第に没入することになった。私が子供の頃から「模型」造りが好きだったことも作用した。

具体的には、ピアノのための「Tapestry」という曲に取り組むことになった。30歳台の半ばだったろうか。これは演奏時間20分を越す大規模な曲である。いつ出来るかわからない長期戦となった。一音一音が模索、暗闇の中を手探りで少しずつ進む仕事であった。無論、この間にも実用音楽の仕事は続けていた。どの作曲家もその生涯の中でこうした作品を手がける経験を持つのではなかろうか。

完成しても、誰に、いつ、どこで、どのように演奏してもらおうか、まったく当てもなく、また考えもしなかった。

この曲の完成には五年以上かかったか。しかしいかに永い夜も明けない夜はない。終りにやや近づいた頃のことであった、NHKの前田直純さんから最近作で何か重要なものはないか、との電話を頂いた。たった一人で夜の砂漠を彷徨中に大規模な救援隊に声をかけられたようなものであった。しかしこうなると、興奮状態から足だけが急いで歩調がややもつれ気味になった。とはいえ、少し急いでではあったが、やがて曲は完成した。演奏は誰に頼むか、NHKは、局が選んでもいいし、私に任せてもいいとのこと。私は自分で選ぶ方を決めた。

## 深沢亮子さんとの出会い

ここで出会ったのが深沢亮子さんである。楽譜を見ておそれをなした演奏家が多い中で深沢さんは引き受けてくれた。ここから私と深沢亮子さんとの現在にいたる

までの永い永い協力とご縁が始まる。人生にはいろいろな出会いがある。その中で運命的ともいうべき決定的な出会いであった。

しかし、引き受けてはくれたが、深沢さんにとってもこの曲はよほどの難儀であったようだ。紙に音の構造を書いてまで研究してくれたとのことだった。録音の実施にはほぼ一年後になった。この間待ってくれたNHKもずいぶん理解があった。花輪さんの番組もそうだが、あの当時のNHKは文化芸術のために無条件で貢献してくれたものであった。近年の経済主義的なあり方から詠嘆されるばかりである。

録音と放送のあと、深沢さんはリサイタルでも会場初演してくれたし、外国でも演奏してくれた。音楽というものは、音が鳴っている間だけ存在するものである。どんな立派な楽譜であってもオトにならない限り存在しないと同じである。この「Tapestry」を突破口として私のピアノ曲の作曲は加速的に軌道に乗った。深沢さんは新曲をどんどん演奏してくれた。そして、1975年のこと、私のピアノ曲だけで一晩のリサイタルを開いてくれた。イイノホールだった。深沢さんの動員力で会場はほぼ満席となった。作曲家にとって演奏家の協力者がいかに有難いことか、心底思い知った。「ソナチネ 青の詩」はこの時のために深沢さんの演奏を念頭において仕上げたものである。

まず何よりもオトになり「存在」が始まることにより作品はその存在が成立し認知される。この経過を経て、ほかのピアニストたちも次第にとりあげるようになった。

## 私のピアノ曲の種類

私のピアノ曲は何故か二つの種類に分類される。第一類は、無条件の絶対作品で、当然、難解、難曲であることは意に介せず作品としての存在を目指したもの。第二類は、簡素にして演奏しやすく、簡潔の極をめざしたもの。教育用の曲はこの中に入る。どうしてこの二種類が出来たか、それは自分でもわからない。運のいいことに、この時期、全音楽譜出版社に私の門下生S君がいて「Tapestry」を出してくれた。私の曲でもっともよく知られているもので、「三つのやさしい小曲」というのがある。これは、もともとカワイの小冊子の巻末に載せるためカワイから委嘱されたものが第一曲である。しかしS君はこれを自社から出したいという。もともと第一曲の「風」がカワイの委嘱曲だったが、全音から出すには一曲だけではもの足りないというので、あとの二曲を書き足して三曲にした。カワイの委嘱曲を別の所から出していいものか、私はS君に聞いたが、かまわぬというのでそうした。最近、それがけしからぬという評判があることを知った。もしけしからんことであつたら当事者に対してはまことに申し訳ない。しかし、この経過はさような次第で、私

も無神経、無節操であったわけではない。この機会に弁明しておきたい。23の小曲集「ちいさな四季」も出た。この出版もS君の手によるものでももちろん全音刊である。

ここまでのことは1970年代のことであった。その後、1980年代以降、私の作風は変化したり、環境音楽と電子音響音楽に関心と焦点を移したりしたが、その後2000年代からまた次第にもとの姿勢に戻った。

深沢亮子さんはかくして私の不離の協同制作者であったが、この人の演奏についても一論を書いておきたい。ここではすでに字数が限界であり、また主題が別になってしまうので書けないが、「演奏家」論、そしてそれ以上に音楽の「演奏」論として、別の機会に一文をぜひ論じておきたい。

## 自作の由来

ピアノ曲以外、特に大編成オーケストラ曲のすすめも聞くことが多いが私のピアノ曲への集中はいまも変わらない。その理由の一つは再演が容易であることにもある。ピアノ曲はソロであるから、ピアニスト本人がその意志により、いつでも、どこでも再演できる。大編成の特にオーケストラ曲は機関決定を経なければ演奏は決まらない。再演も同様である。先述してように、音楽は演奏されオトが鳴っている間だけ存在する。ソロ曲は演奏者本人の意志によりいつでも、どこでも、初演も再演も可能であることは機動性がすぐれている。これも私がピアノ曲にこだわる理由の一つである。

## 人と性格から由来するもの

もともと音楽の勉強を始めてからピアノの勉強は熱心に打ち込んだ。西洋音楽はピアノ音楽に要約される、とベルリンから帰国した最初の恩師、札幌の荒谷正雄先生からの訓育が根底にあった。そのほかに多分、私の、ひきこもり型の性格があるだろう。20歳にならぬ未成年の時期にプロのオーケストラでアルバイトの仕事をした。その中で専門家の集団であるオーケストラの内部の現実を知ってしまったことも意識の底にはあるのかもしれない。北海道という北国に生まれて育った私には通称「ひきこもり型」の性格があるのかもしれない。そんな様々なことが要因としてはたらいっているのかもしれない。自分自身のことでも人とその行為の関係には説明を超えたものがあるのだろう。

(すけがわ・としや：本会 代表理事)

## 近代文化はどのように形成されていったのか ～パデレフスキの演奏活動を例として～

研究・評論 湯浅玲子

### パデレフスキが残した自伝

現在、パデレフスキ(1860-1941)の自伝 Ignace Jan Paderewski and Mary Lawton 1938 *"The Paderewski Memoirs"* New York : Charles Scribner's Sons の全訳に取り組んでいる。ポーランド出身のパデレフスキはショパンの「パデレフスキ版」の編纂者として知られているが、自身もピアニスト、作曲家として活躍した。この自伝は、当時72歳だったパデレフスキに、ニューヨーク在住のルポライター、ロートン氏がインタビューに行き、何回も聴き取りを行って、1冊に纏めたものだ。インタビューは英語で行われている。パデレフスキは、ポーランド人であるので、英語は母国語ではない。そのため、文法上たどたどしい面もある。また、同じ話を何度も繰り返したり、話が戻ったりすることもある。通常ならば編集されてしまうような箇所であるのだが、あえてそのまま掲載している。そのため、読みにくいところもあるが、パデレフスキの人柄が滲み出た一冊となっている。

正義感の強い父親との出来事や、その性格を引き継いだパデレフスキ自身の様々なエピソードに触れると、過去を美化するための本ではなく、自分の生き様を残しておきたいというパデレフスキの強い意志を感じる。

自伝は、第一次世界大戦勃発前までの演奏活動を回顧した内容となっている。アジア以外はすべて旅行した、という演奏活動からは、彼が様々な異文化の著名人とのように触れ合い、どう刺激を受けてきたのか、ということを知ることができる。この一端を知ることが、現代の私たちが抱える様々な問題点を炙り出すのではないかと、そう仮定したうえで、本稿を進めていきたいと思う。

## 音楽現代

2014年6月号 定価840円

♪特集＝作曲家の交響曲に至る道

♪特別企画＝W・フルトヴェングラー（没後60年）VS  
C・クライバー（没後10年）狂の日」音楽祭  
10周年記念～同曲演奏における徹底比較

♪カラー口絵

- ・小澤征爾音楽塾「フィガロの結婚」
- ・ザルツブルグ復活祭音楽祭
- ・バロック・オペラ「ロルミン」
- ・日本オペラ協会「春琴抄」

♪インタビュー 児玉麻里、飯田みち代、鈴木優人、  
鈴木理恵子、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

## パデレフスキの演奏旅行

はじめに、この自伝で回顧されているパデレフスキの音楽活動を、簡単に振り返りたい。パデレフスキははじめからピアニストを目指していたわけではなかった。ワルシャワ音楽院を卒業したときは、作曲の勉強を志し、ベルリンに向かった。そこで出版商の紹介で当時の著名な音楽家たち、たとえばリヒャルト・シュトラウス、アントン・ルービンシュタイン、ヨーゼフ・ヨアヒム、などと交流を持った。ベルリンでの勉強に一区切りつけて教師としてワルシャワ音楽院に迎え入れられた後、パデレフスキはピアニストとして生きていくことを決意した。当時すでに24歳だった。

ピアニストとしては遅咲きであったパデレフスキは、ウィーンでレシエティツキに師事する。レシエティツキの紹介で、ハンス・リヒターや、ハンス・フォン・ビューローなどの一流の指揮者とも親交を深めた。デビュー後、パリでは、グノー、サン＝サーンス、マスネ、ヴァンサン・ダンディ、シャルル＝マリー・ヴィドール、ラロ、フォーレ、フランクなどとも知り合っている。また、ショパン最後の弟子であるデュボア夫人と出会い、ショパンの作品解釈について貴重な助言を得る。後の「パデレフスキ版」の出版につながる運命的な出会いである。

その後渡ったロンドンでは、「パリのライオン」という有難くないキャッチコピーをつけられたが、結果的に大成功を収める。そして、アメリカ演奏旅行も3回実現する。合間にロシア、ドイツ演奏旅行をこなし、オーストラリア、ニュージーランドにも足を延ばした。パデレフスキは、自伝の後半部分で、「自分は今や世界的に知られることになった。アジア以外は全て行った。」と回顧している。当時の渡航可能な国はすべてまわった、ということになるのだろう。

その後に渡ったロンドンでは、「パリのライオン」という有難くないキャッチコピーをつけられたが、結果的に大成功を収める。そして、アメリカ演奏旅行も3回実現する。合間にロシア、ドイツ演奏旅行をこなし、オーストラリア、ニュージーランドにも足を延ばした。パデレフスキは、自伝の後半部分で、「自分は今や世界的に知られることになった。アジア以外は全て行った。」と回顧している。当時の渡航可能な国はすべてまわった、ということになるのだろう。

## “artist” パデレフスキ

パデレフスキはピアノの練習に時間がとられることで、本来すべき勉強がおろそかになっていると危惧し、意識的に語学や学問を学んだ。夜に何人もの家庭教師を



パデレフスキ 20歳の頃

入れ替わり呼んで勉学に励んでいた。そうした貪欲な姿勢は、パデレフスキの問題意識をさらに高めていくことになる。

パデレフスキは、自分をピアニストと称することはなかった。一貫して芸術家“artist”と名乗っている。自伝からは、芸術家としての揺るぎない誇りが常に感じられる。自分の演奏を余興のように聴かれることを嫌い、演奏中に私語があれば演奏を中断して「おしゃべりが済むまで待っています」と客席に呼びかける場面もある。そして、聴衆が演奏に集中するようになった今のコンサートのスタイルは自分が作り出したものだ、と断言している。まさに芸術としての音楽を意識した演奏活動であった。

そうして名声を築いていくにつれてパデレフスキは、演奏旅行の行く先々で歓待されるようになっていった。一流ホテルに宿泊していたことはもちろんのこと、宮廷に招かれて御前演奏を依頼されたり、コンサートに政界の有力者が呼ばれて親睦を深めたり、と厚遇されていた。全盛期にはマネージャー、現地マネージャー、専属のコック、調律師、かかりつけ医などの総勢8人に加え、お気に入りの椅子を持ち運んでの大演奏旅行を行っていた。オーストラリアでは、通りを旗などで装飾し、村をあげての出迎えを受けたという。

### 音楽関係者たちの社会的地位

自伝に描かれている様々なエピソードからは、ピアニスト以外の、当時の音楽関係者たちの社会的地位も知ることができる。パデレフスキが活躍した1890年代から1910年当時は、既にベートーヴェンなどの大作曲家の伝記も多数出版されており、その中で作曲家は崇拜化されて描かれていた。しかし、存命の作曲家は意外と庶民的な生活を送っていたようだ。たとえば、人気作曲家であったマスネは、自分のオペラの上演日を新聞で知ると、チケット売り場まで売れ行き具合を確認しに行っていた、とパデレフスキは証言している。また、ブラームスは行きつけのサロンでいつも静かに座っていたが、パデレフスキと面識ができると演奏や作品の助言がもらえた、などのエピソードが描かれている。

反対に、マネージャーと調律師は現代とかなり異なる立場にあったようだ。マネージャーが音楽家の意向を聞かず、自分の意志でスケジュールを決めてしまうということは日常茶飯事だった。船や馬車などで長距離の移動をしたその日の夜にコンサート、2週間で新曲の協奏曲2曲と独奏曲12曲を仕上げる、などという信じがたいスケジュールが勝手に組まれていたようだ。また、当時の調律師は演奏家より権力があつた。調律師が演奏家の希望に沿うことは、自分の持っている技術を活かすことにならないと考えられていたらしく、パデレフスキの希望を無視して調律した結果、タッチが重すぎて指を痛めた、というエピソードが載っている。しかし、そこで驚くのは、パデレフスキは決して調律師にクレームをつけようとしなかったこ

とだ。それどころか「調律師も自分のプライドが大事だったのだろう」、と理解を示している。

また、音楽批評家の存在にも注目したい。当時、音楽新聞というものも存在したが、より大きな影響力を持っていたのは一般紙の音楽批評欄だった。コンサートの翌朝には批評が載るというタイムリーなもので、批評に演奏家の将来が左右されると言っても過言ではなかった。パデレフスキは、自分に好意的だった批評家とそうでない批評家についてそれぞれ名前を挙げて回顧している。

## サロンや応接間で育まれた文化



アルマ・タデマの応接間

自伝では、文化人たちのサロンや邸宅で繰り広げられた交流についても詳しく回顧されている。例として、ロンドン滞在中に訪れていたアルマ・タデマ家の集いがどのようなものであったか、自伝の一部を引用しよう。

アルマ・タデマ家は、大変芸術的な家庭で、芸術界のなかで重要なものはすべてあの美しい家のなかにあった。ロンドン中の人たちがこの家にやってきた。(中略) 彼の家での有名な集まりというのが毎週月曜日にあったと思う。そこにはロンドンの、いや世界中の最も華やかな社交界の人たちがやってきた。いつも音楽のプログラムがあって、その後で美味しそうな夜食が出た。そういう機会では度々演奏し、それがとても楽しみだった。

アルマ・タデマはおもてなしが大好きで、きわめて親切で愛想がよかった。(中略) 彼がどんなに音楽を理解し、真の情熱と造詣の深い知識を持って音楽について話しているか、いつも驚かされた。

アルマ・タデマ家は、いわゆる「ハウス・ビューティフル」の邸宅で、その応接間は調度品から壁紙まで全てに美を追求した唯美主義の影響を受けていた。ゲストたちは、調度品を鑑賞しながら芸術談義に花を咲かせていた。サロンや応接間で築かれた人脈が、その後の音楽活動に大きく影響したことは言うまでもない。

また、パデレフスキはサロンなどの集まりの他に、個人的にも様々な文化人と親交を深めた。イギリスの画家、バーン・ジョーンズもその一人で、アトリエに招かれたパデレフスキは、肖像画を贈られている。そしてアメリカでは、作家、マーク・トウェインとも知り合い、その才能を認めている。

この時代の文化人同士の交流で共通しているのは、必ず個人宅で食事を挟んで長時間共に過ごしている、ということだ。定期的に開催されるケースも少なくない。外食産業がさほど発達していなかった当時、客を自宅に招き、食事をご馳走するのは自然の流れだったのだろうが、自宅に招くことにより、より親密な交流も可能になったというのも事実であろう。

### 密なコミュニケーションから生み出されるもの

現代の演奏家は、飛行機を利用して精力的に演奏会が行える環境にある。1か月以上も船旅を続けたパデレフスキよりかなり効率よくスケジュールをこなしているが、現地でどれだけ人やその土地の文化と触れ合っているか、という点から考えると、100年前のパデレフスキの方が密だったのではないかと推測される。現代は、現地での空き時間を、割とフレキシブルに使うことが多いようだが、当時は、交通が不便な分、滞在のチャンスを活かそうと、かなり前から面会の約束をしたり、何時間もかけて人と待ち合わせをしたり、周到な準備をして現地に赴いていた。そうして実現した貴重な面会は、長時間にわたって密なコミュニケーションが行われていたようだ。自伝でも、数回しか会ったことのない人に対して「生涯にわたっての親友となった」「かけがえのない存在」などという言葉で賛辞しているが、決して大げさではない気持ちだったのだろう。また、接待された



バーン・ジョーンズによる  
パデレフスキの肖像画（スケッチ）

家の応接間で演奏し、その場で感想を聞き、意見交換する、という実践の場の積み重ねが、通常のコンサート以上の貴重な経験となっていたようだ。

現代では、交通手段としての船旅も、客を接待するための応接間もほとんど消えてしまった。初対面の人を家に招いて長時間語り合うなどという機会は皆無だ。プライバシーの尊重という意識が高まってきたことも要因のひとつだろう。しかし、効率よく移動し、外（店）で人と会うのは、便利ではあるけれども、そこで何が芽生え熟成されるのか、と問われれば、かつての時代ほど得るものは多くないかもしれない。効率性と生産性を追い求めた結果、人は時間のかかることを避け、成果だけを重んじるようになってしまった。パデレフスキが、世界を転々と演奏旅行をしながらも孤独感にさいなまれることもなく、現地で次々と友達ができていったのは、密なコミュニケーションの賜物だ。



パデレフスキのカリカチュア

他人を貪欲に学ぼうとする姿勢や好奇心は、その場ではすぐに金銭という結果に結びつかないかもしれない。しかし、パデレフスキの自伝からも明らかなのは、時間をかけた密なコミュニケーションが、やがてひとつの文化を形成し、関わった人たちとの仕事にも結び付いている、という紛れもない事実である。

第一次世界大戦勃発後、パデレフスキは祖国を救うために、一端、演奏活動を休止し、政治活動に専念する。政治活動に入った時、ピアニストであるという意外性が相手にインパクトを与え、演奏旅行で知り合った政界人たちとはスムーズな交渉ができた、とパ

デレフスキは回想している。

(ゆあさ・れいこ：本誌副編集長)

## 範例のない音楽分野へのチャレンジ

未来の音楽人へ(14)の原稿依頼が中島編集長から送られてきた時、いささか戸惑いを感じた。それは私がプロの演奏家や作曲家として桜舞台に立ったことがないこと、また自分の半生を振り返った時、今までこのシリーズを書いてこられた人たちのような恵まれた音楽環境になかったという思いが頭をよぎったからである。ちょうどこのメールを受け取った時、私は中国の音楽大学を訪問中であったので「なぜ私のような音楽環境に恵まれなかった晩生の者が、この国を代表する星海音乐学院や武漢音乐学院(日本の音楽大学に相当)で講演をしているのか」という他の人と異なる人生体験を書けばよいのではないかと思い直し、「了解」との返信をしてしまった次第である。

## 「現在、青少年時代、ヤマハ時代」

現在、私は香港に本部を置くアペカ(APEKA=Asia-Pacific Electronic Keyboard Association)代表、日本電子キーボード音楽学会事務局長、昭和音楽大学電子オルガンアドバイザーの任にあり、主として、電子オルガンに関する「音楽大学での教育」と「クラシック音楽における演奏」のあり方に関与している。

私はこども時代を愛媛県南予の片田舎で過ごしていたが、ある日天にも昇らんばかりの出来事が舞い込んできた。それは、第二次世界大戦も終わりに近づいた昭和19年、八幡浜市に住んでいた親戚が4オクターブの足踏みオルガンとバイエルを疎開荷物と共に送ってきたからである。バイエルの漢字と説明は、小学校4年生の少年にとって難しく、あたかも外国語の原書を読み解いているようであったが、まわりに楽譜を読める人がいなかったため、誰の助けも借りずに何とか終わりまで弾きこなし、唱歌などを楽しんでいた。

これは私にとって範例のないものへの最初のチャレンジであったが、その後の愛媛大学農学部時代の愛大合唱団指揮者や、東京学芸大学時代に出会って後に生業になるエレクトーン<sup>注1</sup>も独学であった。学芸大専攻科修了後、エレクトーンのメッカであった銀座エレクトーンセンターの講師に採用され、昭和44年に日本楽器(現、ヤマハ)に入社した。

そこで、ヤマハ音楽教室の指導者として東京、ロスアンゼルス、ハンブルグで企業人音楽家として働き、1985年帰国。翌年、「エレクトーンの専門家対策と社会的認知を高めよ」という主旨の辞令を受け、今日にいたるまで音楽大学とクラシック音楽における電子オルガンの教育と演奏に携わることになる。不思議に思われるかも知れないが、それ迄、このような教育や演奏活動は1980年頃のオランダを除き、世界のどの地域でも本格的に行われてこなかった。それは、電子オルガンメーカー

がこの楽器を趣味の楽器、ポピュラー音楽の楽器と位置付けし、営業的観点から成功を収めてきたことにある。

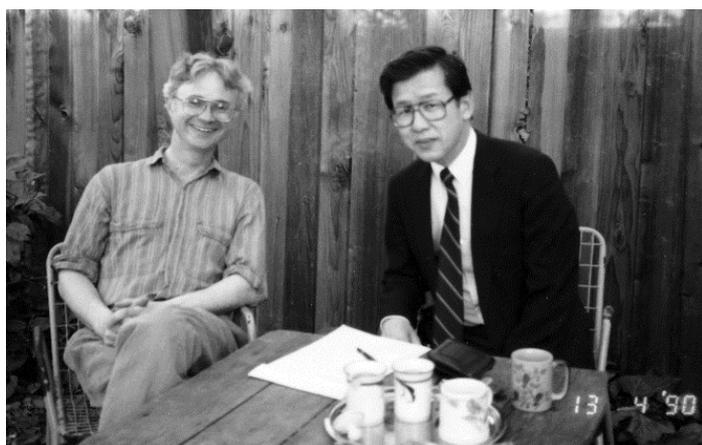
通常、日本で新しい分野にチャレンジしていく場合、多くの先例を欧米に見ることができが、電子オルガン音楽の新しい行き方に関しては、範例がないにも等しかった。以下の二例は、共鳴者からアドバイスをもらいながら教育と演奏面で展開してきたものである。

### 「音楽大学におけるエレクトーン教育」

何事でも社会認知されるためには、大学でそれに関する研究と人材養成がなされる必要がある。音楽でもピアノ科をはじめアコースティック楽器のほとんどのものが専攻として、音大で学ぶことができる。電子オルガンという新しい専攻が音楽大学に開設されるためには、ハイテクノロジー楽器としてふさわしい教育内容が必要となる。そこで最初に行ったことは、「音楽の歴史は、楽器の歴史である」「楽器は、各時代のハイテクノロジーの結晶である」ということをベースにハイテクノロジー楽器ならではの電子オルガンの実技内容を音楽大学に提案することであった。そのポイントは次のもの。

	作品と実技内容	目的	作品例（全日電研コンサートより）
1	オリジナル作品	楽器のアイデンティティ	西村朗「ヴィシュヌの瞑想」ほか
2	スコアリーディング奏法	応用演奏力	モーツァルト「ピアノ協奏曲」ほか
3	パイプオルガン作品	オルガン属の歴史の学習	バッハ「プレリュードとフーガ」ほか
4	即興演奏	即興演奏力	メロディの編曲演奏やアドリブほか

1986年、ヤマハがバックアップして全日本電子楽器教育研究会が設立されたのをきっかけに、その後18の音楽大学に電子オルガン科<sup>注・2</sup>が設置された。一方アジア諸国でも日本の音大に刺激されて、中国、台湾、ベトナム、タイといった国でも電子オルガン科が開設されてきている。中でも中国では、中央音楽学院、上海音楽学院など、この国の中核となっている8つの音楽学院に電子オルガン科が日本を凌駕する勢いで展開されはじめた。



ハイブリッドオーケストラでエレクトーンを活用したオペラ「ニクソンインチャイナ」の作曲者としても有名なジョン・アダムスと電子オルガンのオリジナルを話合う。サンフランシスコのアダムス邸で

### 「ハイブリッドオーケストラ」

最近ハイブリッドばやりで、猫も杓子も「ハイブリッド〇〇〇」という名前が目につく。異種混合で新しい価値創造を目指したハイブリッドオーケストラ<sup>注・3</sup>のオペラ団での採用は、1990年の東京室内歌劇場公演（新宿のモーツァルトサロン。ペルゴレージの「奥

様女中」)にまで遡ることができる。その狙いは、電子楽器の音がスピーカーから出てくるためにアコースティック楽器のようなふくらみに欠けてしまう現実に、アコースティック楽器と電子オルガンの共生により、その響きが生のオーケストラの響きに近づけようとするものである。

この共生という新しい演奏形態の可能性は、ミラノ・スカラ座の1988年の日本公演時に演出部長であったA.マダウ・ディアツ氏らが関心を示したことがひとつの契機になり、今では電子オルガンによるオペラ上演はものめずらしいものではなくなった。この共生の考え方はオペラ分野だけでなく、音楽大学教育の中でも浸透しつつあり、昭和音楽大学では管打楽器科のアンサンブルの授業にオーケストラのレパートリーを経験させるためにエレクトーンが弦楽器を担当する授業が7年前から始まっている。この動きは、2012年の広州国際電子キーボード芸術フェスティバルにおいて、中国の華南地方を代表する星海音楽学院のハイブリッドオーケストラが披露され大きな話題となった。また本誌でも紹介されているように韓国では韓国室内オペラ団を中心にハイブリッドオーケストラによるオペラはめずらしくなくなりつつある。

将来、日本発の電子オルガン教育と新しい演奏形態がアジアを超えて欧米にも浸透していく日が待たれる。



1990年代にハイブリッドオーケストラによるオペラの実用性をイタリアから発信し、後日、日本とイタリアでオペラやバレエ公演を実現したミラノ・スカラ座の演出家A.マダウ・ディアツ氏。スカラ座の彼の部屋で公演打ち合わせ時のスナップ



昨年10月、ハルビン大学マスター講座での歓迎ミーティング。華やかな横断幕、立て看板、ポスターに驚かされたと同時に大学を挙げての意気込みを感じた

エレクトーンというハイテクノロジー楽器の演奏を通して、また日本電子キーボード音楽学会や昭和音楽大学で研究に携わったこと、そして海外駐在を経験したことによって、すばらしい人たちとの出会いや多くの友人を得ることができた。小学校4年生での範例のないものへのチャレンジ

に端を発し、その精神を長年に渡って持ち続けてきたことが、この分野で何がしかの社会貢献に結びつくことができたのではないかと考えている。21世紀は、スーパーシニア時代の到来など過去に経験したことのない多様化社会になるといわれている。若く未来のある方々には、既成概念に捉われることなく音楽のベンチャー企業といえる分野に積極的にチャレンジしていただきたいと思います。

注 - 1 エレクトーンはヤマハ製造の電子オルガンのブランド名

注 - 2 電子オルガン科という名称はピアノ科と同じように正式名称ではない。・・・科という呼び方は慣習として用いられていることが多い

注 - 3 ここでのハイブリッド（異種混合）は、電子楽器（電子オルガン）とアコースティック楽器（バイオリン、トランペット、打楽器など）の混合を指す



2012年の第2回広州国際電子キーボード芸術フェスティバルでシベリユースの「フィンランディア」を演奏する星海音楽学院ハイブリッドオーケストラ。指揮は、昭和音大の太田茂教授。

（あがた・しゅん：本会 研究会員）

《おしらせ》

今月号は 「連載：電子楽器レポート」を休載します。

## "Compositions,, と私の24年

～新作エレクトーン曲コンサート Compositions 2014 開催に因んで～

作曲：菊地 雅春

私が電子オルガン・エレクトーンに手を染めたのは今から50数年まえの1960年頃、まだ芸大作曲科3～4年生位の時であった。当時のヤマハ社長、川上源一氏の「芸大作曲科の、ポピュラーもある程度知っている学生を集めよ」という鶴の一声がきっかけであった。それから50年以上もこの楽器と対してきたわけだが、しばらくは編曲が殆どで、自分の本業（のつもり）である作曲家としても対するようになったのは、20数年もあとになってからである。理由はそれまでの音質がシリアスな表現に適合しなかったからだが、それが1987年に出たHS、HXシリーズ頃から音質が格段に向上し、翌年折しもドイツなどヨーロッパにHX-1で演奏旅行に出られる森下絹代さんからの委嘱で書いたのがこの6月27日に再演される「秋・TEMARI-UTA」である。

この作品は初演先が海外（ドイツ）なので「何か日本的なものも加味して」という条件がついているため、この機種にはじめて登場した“MDR”を使って2小節単位の日本的オスティナートをまず設定し、その上に“ドラマ・ファンタスティック”が展開して行くという音楽を作った。

このように私がエレクトーンのための本格的作品に取り組むようになったのは1988年以降ということになるが（もちろんそれ以前にも「12のわらべうた」「ラプソディ」「小鼓、大鼓とエレクトーンのための“舞衣（まいぎぬ）、「大日本活劇絵巻～其の壺“猿飛佐助”」などがある）、本「Compositions」に参加するようになったのは2年後のことである。

そしてそれらの作品のほとんどがその時々の新機種の音色、付帯機能などを発想の基にしていると言える（“否定的なものも含めて）。以下、それらについてのいくつかを順を追って述べてみよう。

### ・「MOTION PLAY “アリスの森,,」（1990）

私の記憶では確か“COMPOSITIONS,, シリーズ第1回への参加作品。

タイトルの冒頭にもあるように“機械任せ,, でなく、すべての手足をふんだんに使って弾くこと,, を課した作品。曲中の左手による8分音符の刻みが辛い、弾き遂げたあとのカタルシス効果は相当なものである筈である。

### ・「Melt together!」より「KATA-KOTO」（1992）

レジストの[Vocal]のひとつをある限られた音域の中で使い、小さな子供の片言を表現したもの。

・「LAST! ～on 3 under3～」

楽器に付帯しているさまざまな〔オートリズム〕のうち、評判があまりよろしくない“Swing”を単なる“連続するオブジェ”あるいはメトロノームとして扱い、その3拍子のカウントの上あるいは下にさまざまな楽想が行き交うさまを構想した作品。どちらかという作曲仲間などに評価された。

尚、タイトルの「LAST!」であるが、このネーミングには二つの意味がある。



最近の筆者（本年4月12日に福地奈津子さん撮影）

ひとつは、この頃いつまでたってもいい楽器が生まれてこないで、業を煮やして「この楽器のための創作はこれ限りにしよう」と決意したこと。もうひとつは、作曲中に受けた腹部のエコー検査で総胆管にガンらしきものが見付かり、開けてみないとわからないということで開腹手術ということになったが、本番がこの手術日と重なったので欠席を申し出たところ、本会議の助川敏弥さんに「死をとるか、芸術をとるか」と迫られたため、内心にやっとながらも手術日の変更を選んだこと。すなわ

ち「LAST」は死を暗示するものでもあった。

まだあるが、キリがないのでこの辺でやめておくが、以上のほか「COMPOSITIONS」で私が発表した曲は、他に「民話ミュージカル“鷲姫”より」（1991）、「エレクトロニック・サウンド・ポエム“宰（おさむ）”」（5曲）」（1995）、「2台の電子オルガンのための“ラピッド・ファイア”」（1996）、「こよなく美しき」（1998）、「ハッピー・デュオ～電子オルガンとピアノのために」（2002）、「オルガンとコントラバスのための二重奏曲」（2003）、「ダンス・3つの架空シーンのために」（2006）、「リコーダーと電子オルガンのための「サウンドスケープ“森の主と小鳥たち”」（2011）などがある。

自分でも「よくもこんなに書いたな」と思うが、その成果はともかくとして、これも本「日本音楽舞踊会議」の息の長い活動の賜物と感謝している。

（きくち・まさはる：本会 賛助会員 ）

# 歌の道・我が音楽人生 (5)

～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～

日本合唱協会代表 久住 祐実男

## 第1部＜音楽家を志す迄＞Ⅴ

中学2年生の夏、忘れられない8月15日をむかえた。この日は疎開先の葉山において、学校は休みで朝早くから近所の桜山で、学徒動員という名目の労働者となって、松の根っこ堀をやらされていた。松の木の根から松根油を作ってガソリン代わりに使うためだ。真夏の太陽のもとで汗をかきながら働いていると、昼近くになって今日はこれでおしまいにする、昼に重大ニュースがあるから、家に帰って聞く様にと言われた。それが敗戦の玉音放送だった。何か悔しいような、悲しいような感覚で聞いた。戦争が終わったのだという脱力感とともに、ほっとした気持ちにもなった。これからどうしたらよいだろうか等全く考えなかった。ただこれからは空襲警報もならないだろうし、好きなレコードが夜でも聞けるようになるのかな位しか考えなかった。

私は翌日、早速近くの森戸海岸に飛んで行った。海を望むとなんと敵と見られる軍艦の艦隊が相模湾を堂々と航海しているのが手に取るように見えた。横須賀に入港するためだ。思えば東京で焼け出されたあと、焼け跡にいた私を目がけて艦載機から機銃掃射を受け、物陰に隠れると、又翼をひるがえして機銃掃射を繰り返した。葉山から中学に通うある日横須賀線に乗っていると突然艦載機が襲い機銃掃射を繰り返し、電車は全速力で保土ヶ谷と戸塚の間のトンネルに逃げ込んで難を逃れたことがあった。一番後ろの車両はハチの巣のようだったが、幸い怪我人はいなかった。その憎き艦載機を載せた空母もその艦隊にはいた。それを眺めていた葉山の海岸は穏やかに晴れ渡っていて、頭上では艦載機ならぬトンビがのんびりと鳴きながら旋回していた。

数日が経って学校に行くと学校はすっかり落ち着いていた。先生方はこれからはしっかりと勉強が出来るようになった。君たちはしっかりと勉強をして、これからの日本を支えるような人になってほしいと言われた。私は中学3年から始めた建築家になるための勉強にまだそれほど実が入っていなかったが、山田申吾先生からのご指導でまず絵のデッサンから始めた。学科は数学を重点に置いていたが、のんびりと構えていた。

中学4年になると、早い人だと高等学校（旧制高校）への進学が出来るので、受験勉強で周りは目が血走っていた。私は進学を5年生になってからと決めていた。しかし占領軍からの命令で学校制度が変わり、いわゆる633制となり中学5年は

新制高校の2年生となった。大学への進学はもう2年先になった。その年に現在のセンター試験の先駆けとなる適正試験（多分その様な名前だった）と云うのが全国一律で実施された。初めての○×式の回答だった。結構難しい問題が並んでいたが半分は当てずっぽうで○×をつけた。後日点数が発表されると驚いた事に私は80点の高得点を上げ、全国的にも1割に満たない成績だった。まぐれだったにせよ私はすっかり気を良くしていよいよ芸大の建築科を目指して受験勉強に実を入れる事にした。

受験勉強という意識のもとで始めると、自分の頭脳の働きがはっきりしてきた。文科系すなわち右脳の働きは極めてスムーズだったが、理科系すなわち左脳はギクシャクしていた。しかしそれを逆手にとって、理科系の勉強に全力投球することにした。理科は嫌いでなかったし何とかあったが、数Ⅰ数Ⅱとも手強かった。持ち前の粘りで頑張った。サイン、コサイン、タンジェントは建築には必須となる。勉強に疲れると、レコードを聴いた。そして又頑張った。クラシック音楽は私の良き支えとなった。お陰で勿論ペーパーテストだが、2級建築士の資格は取れる位の力がついてきた。

しかし、芸大の模擬試験等を見るとそう簡単ではないことは判っていた。後1年では難しいと思った。1年や2年の浪人は覚悟して勉強を続けようと思っていた。ル・コルビジェや丹下健三等の色々な設計図を見てはわくわくしたが、それも大学を出て1級建築士にならなければ下働きだけで終わってしまうので、とにかく第一関門を通過しなければと思った。（つづく）



久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963年、仲間20人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

あゝ生きている！

— 萌えいずる緑の季節に —

新緑に心うきたち、旅ごころを誘われる五月の半分、思わぬことで入院生活を余儀なくされた。

多くの参考にはなりそうにもない話ではあるが、思わぬことの顛末とは次のとおり。

その日、松本の古刹、盛泉寺（じょうせんじ）の本堂でのコンサートを依頼されていた。由緒は鎌倉時代にさかのぼる建造物であれば、バリアフリーなどは思いも及ばない。しかし車椅子を使う私の便宜をはからい、あちこちにスロープをしつらえ、万端ととのえて待っていた。思わず合掌。

上高地の麓、小高い丘にある寺に到着。本堂の脇の僧坊が楽屋になっている。

石畳の玄関から、あがりがまちの上に続く長い廊下に、スロープがしつらえてある。雨ふりであったので車椅子のタイヤが汚れている。廊下の床に新聞紙を敷いてもらい、そこを歩きつ戻りつ汚れをおとす。

うしろに目がない悲しさ。戻り過ぎて、車椅子ごと背中から転落。石畳までの段差も加わって、後頭部をしたたかに打ちつけた。せっかくのスロープ設置も無にってしまった。

目がまわるとは、こんな状態をいうのか……。ぼんやりした意識の中に救急車のサイレンが聞こえる。

運ばれた病院で、いろいろ検査され異常なし！帰っていいとのこと。それでもと、とどまりまんじりともせず迎えた翌朝。強いめまいと、吐き気におそわれた。

しかし、緊急を脱したということで退院に。自宅に戻るもこれらの症状おさまらず、行きつけの病院に向かう。即入院。

検査の結果、強いムチ打ち状態で、三半規管中の耳石がはがれ、浮遊するためにおこる「めまい」であることが分かった。



症状、意外とめんどうか？

「良性発作性頭位めまい症」が診断名である。ともあれ天井を見上げての入院生活。じっとしていると、首筋や顔や肩、胸などが痛みはじめる。これは思いのほか面倒なことになっているようだ。観念するしかない。

お寺でのコンサート、続いての老人ホームでのコンサート、ともにキャンセルになってしまった。申し訳なかった。

玄関の石畳に仰向けで、目をつぶっている。あゝこれぞ一巻の終りかと、救急車を待つ一刻。家人をはじめ見守る関係者数名は、永遠の別れを覚悟したらしい。「死んじゃダメよ！」の声が聞こえた。それにしても吾がおだ仏のステージがお寺とは、できすぎだ。

まずは、とりあえずの生還となった。運が良かったというべきか。

頭を動かすたびに、めまいと吐き気。しばらくは絶食。点滴の管につながれた。このところ、老人ホームやお寺、病院でのコンサートが多い。老いの周辺さながらの「終活」コースめぐりのようでもあるな……。少し前まで保育園でのコンサートで忙しかったのに……。などと余計な思いに気をまぎらわせていた。病室の窓の外は、遠くに近くに緑したたる五月。

シューマンの「詩人の恋」の旋律の一節が、せつなく甘美に胸にせまる。＜輝く五月の、花すべての蕾開き、私の心のうちに愛が芽ばえた……。＞

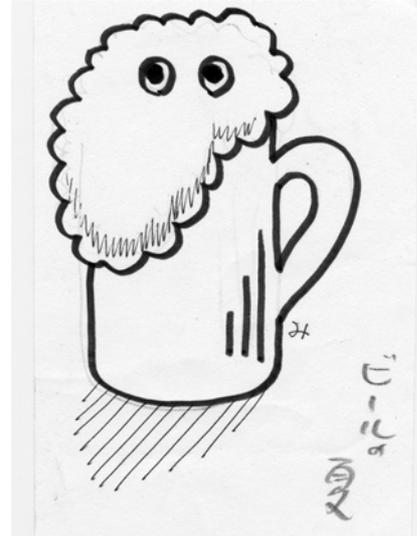
若い娘さんの結婚披露宴で、お祝いにこの「美しい五月に」を歌った。ドイツ語と日本語で。若葉に五月の風さわやかな、軽井沢でのこと。

聴くのはもっぱらポップス。およそシューマンなどとは無縁の新郎の目に、うつすらと涙が浮かぶのを見た。幸せな二人だ。170年の時空をこえて、ハイネの詩がシューマンの旋律にのって若い二人の胸に共鳴したのであった。

今、こうして原稿用紙に向かっている。めまいは続いているが、とりあえずの日常生活に戻れた。

半月ほどの入院生活は、総じて快適であった。寝たままでの入浴なんてのも経験した。幸せな患者である。

感謝の思いで、名前を記そう。「まつもと医療センター松本病院」。医師はもちろん、看護師、医療スタッフの連係など、患者をつつむ笑顔に励まされたのであった。



まずはビールだ！

明後日は、退院後、初めての診察日だ。病院への道すがら、五月の緑の中を走る。川の兩岸を埋め長く続くアカシアの木々からは、白い花房が、甘い香りを広げているに違いない。

私の五月はこれから始まる。＜楽しや五月 草木は萌え、うれしや五月 光は映え＞モーツァルトの「春へのあこがれ」をシュヴァルツコップで聞きたくなる。生きている手応えを感じる。あゝつくづく生命（いのち）に向きあう春なのだ。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

【挿絵】武田 光弘(たけだ みつひろ)





## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 49 回〕

### チャイコフスキーの死因

人が死ぬと、何才だったか、何が原因だったか、他人事ながら気になるものである。50才と聞けば早すぎるなあ！と思うし、事故でと聞けば、防げなかったのか！と残念に思う。人間誰でもいつかは死ぬのだと承知しながら、しかしその形は何とまあ多彩なことだろう。一般的な病気によるものだけでも、脳系・心臓系・呼吸器系・消化器系などがあるわけだし、それらに加えて事故死や殺人、自殺による死というのものもある。

私たちのクラシックについて、大作曲家たちがどんな死に方をしたかも、好きになると大いに気になるけれど、特に変わった死因（いずれご紹介しよう）とは別に、従来知られていた死因が、じつはそうではなかった、真実は別のところにあったという発見が、比較的最近公にされて話題になった。それをご紹介してみよう。

ロシアの作曲家、「悲愴」交響曲やバレエ音楽「白鳥の湖」などで知られるピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の死こそが、それなのである。世界的になり、ロシアでは知らぬ人がいないほど有名になっていた彼が亡くなったのは、最後の交響曲第6番「悲愴」を初演した9日後、1893年11月6日のことである。死因は、生水を飲んでのコレラと伝えられた。

伝染病として名高いコレラは、歴史的にもヨーロッパやロシアでたびたび流行し、一種の風土病のように受けとられていた。感染すると脈拍が弱まり、下痢、おう吐、排尿が頻繁になり、水分を失って血行障害を起こす。原因はバクテリアよりひと廻り大きな病原菌ビブリオンともいわれるが、ともあれ伝染性が強い。死者が出ると家中が検疫され、布団は焼かれて徹底的に処置されるのが一般的であった。



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

にもかかわらず、チャイコフスキーの場合には、検疫は行われず、布団は焼かれないで洗われただけ。通常コレラ患者

が納められるべき鉛の棺にも納められずに公開の安置。立会人も伝染病にしては異常に多い16人。公開後は、多くの人々が触ったりもしたということから、これは怪しい？何かある？と睨んだ人物が現れた。

アレクサンドラ・アナトリエヴナ・オルロヴァという、のちにアメリカへ亡命した女流音楽学者で、彼女は独自に調査をすすめると、1978年に、ロシア博物館のアレクサンドル・ヴォイトフから聞きとった話として、次のような死因説を明らかにした。すなわちチャイコフスキーが若い頃に覚えた同性愛の性癖から抜け出せず、死の直前にも、ある貴族の若い甥とそのような関係に陥った。心配した貴族はそれを止めさせるべく、チャイコフスキーを訴える手紙を書き、検事総長ニコライ・ヤコビに手渡して皇帝に届けるよう依頼した（皇帝がヤコビに預けたとも考えられる）。

ところがヤコビは、チャイコフスキーが若い頃法律学校で学んでいた時の同級生であった。裁判になり、スキャンダルが公になって、学校の名誉、チャイコフスキーの名に傷がつくことを心配した彼は、他の同級生6人を含む名誉法廷というのを内輪に開き、そこにチャイコフスキーも呼んで、5時間も論議した。

そして「チャイコフスキー自身が自殺せよ」という結論を出し、2日後にそれを実行させた。したがって本当の死因は砒素系の毒物によるものだ——というのである。私たちには初耳！びっくりである。

これに対しては、さらに反論する学者も出たりして、必ずしも結論は出ていない。しかし法律学校時代（10代）にチャイコフスキーが同性愛を覚え、それに悩んでいたことは、日記にも「今日、Zが異常に激しく私を苦しめる。おゝ、神よ、私がどんなに苦しんでいるか、Zの感情にではなく、何よりもそれが私の中にあるという事実に」（Zは、隠そうとして記号化したもの）とあるから、確かである。イギリスの権威ある「ニュー・グローヴ音楽辞典」（1980）もオルロヴァ説によって改訂をしているから、これは多分信じてよさそうな気がするが、そうすると最後の交響曲「悲愴」が気になってくる。終わり方が常識破りともいふべき「アダージョ・ラメントーソ（悲しみのアダージョ）」で消えるように終わっているのだが、これこそ死を覚悟していたチャイコフスキーの、この世に訣別するメッセージだったのではなかったか。そう思えて、何とも痛ましく聞こえてくるのである。

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



【【連載】】

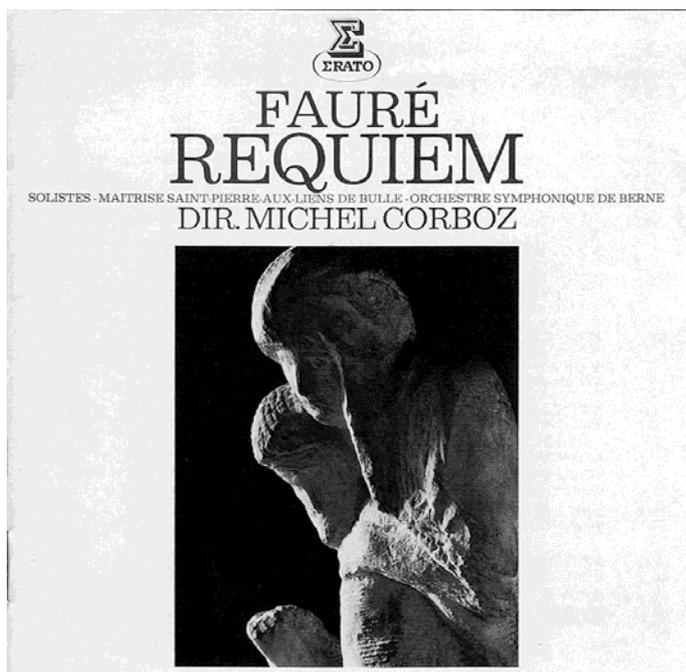
# 音盤奇譚

板倉 重雄

第 54 回

コルボ指揮のフォーレ：レクイエム

ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン音楽祭が今年で 10 年を迎えた。東京国際フォーラムでは、5 月 3～5 日に有料公演が約 150 回も催された。私は 5 月 3 日に出かけ、ミシェル・コルボ（1934～ ）指揮のフォーレのレクイエムに一生消し難い感動を覚えた。



コルボの名を日本で一躍有名にしたのが、1972 年に録音したフォーレのレクイエムの LP だった。現在この作品は様々な稿が演奏されるが、当時は二管編成による 1900 年版を使うのが常識だった。そして演奏もソリストにオペラ歌手を起用してロマンティックに演じたものが主流を占めていた。ところがコルボは 1900 年版を用いながら、女声コーラスに少年合唱を、ソリストにボーイ・ソプラノを起用して、この作品からルネサンス期の宗教音楽のよう

な澄んだ透明感を表出して見せた。実はこの録音の合唱団はコルボのおじが率いていた聖歌隊で、亡くなったおじへの追悼のために録音したことを、後年コルボは明かしている。その後、彼がこの作品を演奏する際は、1961 年に自ら結成した少人数の大人の合唱団、ローザンヌ声楽アンサンブルを指揮し、譜面も小編成オケ用の 1893 年版を使っている。

実演で始めて接するコルボは、80 歳に達している。第 3 曲まで、中間色を微妙に揺れ動く陰影の深さに感じ入ったものの、音楽の身振りが小さいことに物足りなさも感じていた。しかし第 4 曲ピエ・イエズスで合唱団員の一人がソロを歌い始めた途端、会場の空気が一変した。彼女は少年のような声をもった大人で、同時にカストラートやヴァイオリンの E 線のような官能美を併せ持っていた。客席からはすすり泣きが聴こえて来た。コルボがこの声質の女声歌手を見出した時点で勝負は決し

ていた。自らが抱く作品のイメージに合った声や楽器を見出す類まれなセンス。コルボが合唱指揮者として若い頃から成功を収めてきた理由が直感的に理解できた。その後は、深く美しい演奏に惹き込まれるばかりだった。

●フォーレ：レクイエム（1900年版） 【写真：前ページ】

ミシェル・コルボ指揮ベルン交響楽団

サン・ピエール＝オ＝リアン・ド・ビュル聖歌隊、アラン・クレマン（BS）ほか  
[ERATO WPCS-22092 (CD) ]

1972年、ベルンでの録音。コルボが38歳のときに録音し、LP時代に絶賛された名盤。



●フォーレ：レクイエム（1893年版） 【写真：左】

ミシェル・コルボ指揮シンフォニア・ヴァルソヴィア、ローザンヌ声楽アンサンブル、アナ・クリンタンス（S）、ほか

[MIRARE MIRO28 (CD) 海外盤]  
2006年録音。コルボ72歳のときの録音で、使用譜、オケ、合唱団は私が聴いた実演と同じ（実演のソプラノはシルヴィ・ヴェルメイユ）。日本の批評ではまだ紹介されていないが、72年盤よりいっそ

う感銘深い演奏。

【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。





## 人・アート・思考塾(3)

作曲 小西 徹郎

私はいつも本番のときに公演会場から歩いて10分以内で行ける楽器店、100円ショップ、電気屋を必ず下調べをする。何故ならもし万が一楽器や機材にトラブルが発生した場合すぐに対応できるようにしていきたいからだ。そして早めに現地に行き、下調べした店を訪れ、必要なものの品揃えがあるかを確認する。これは仕事として音楽やアートをするうえで必要不可欠なことだと思っている。



3月の岡山での水と緑のアートプロジェクト25AIRの際も同様に岡山市内の楽器店を調べていくつかみてまわった。そんな中とても面白く、素晴らしい店を見つけた。岡山市内の西川緑道公園から10分ほどの表町というアーケード街の中にあつた、「管楽器修理工房服部」という販売というよりは修理、リペアを専門とした店だつた。お店に足を踏

み入れると若い職人に声をかけられた。このお店の代表技術者の服部 悟氏だ。とても明るく気さくですぐに仲良くなった。楽器の話や今現在の楽器業界の状況などをたくさん話した。東京では中古楽器、ヴィンテージものはある程度出回るが地方に行くとなかなか良いものが出回ることがなく、品揃え面で苦労しているときいた。新品の品揃えではなく、中古をきちんとリペアして良い状態にして販売する、という信念、そして楽器を常に良い状態にして使うことが大切であると声を大にして常に訴えかけているこのお店の姿勢に私は心を打たれた。また、学校備品の楽器は最終的には廃棄処分しなければならない、こういう現状を何とか打開できないだろうか？そのことにも服部氏は取り組んでいる。私も中学時代にゴミ捨て場に紐でくくられて廃棄されていた楽器をみて不憫に思い自宅にこっそり持ち帰ったこともあつた。その持ち帰った楽器はトロンボーンだつたが、普段触れることのないトロンボーンを手にして練習することによってトランペットとの演奏の仕方の違いやポジションを覚えたりすることができた。そういうことが今の活動にも役立っている。使えなくなったから簡単に捨てるのではなく専門の職人にみてもらい修理する、調整をする、そのことがモノを大切にすることにつながるだろう。しかも昔の楽器はすべて楽器職人の手作業で製造されていたのだから、ひとつひとつの楽器に職人の思いが詰まっているのだ。

M. Kumi Ko 2014

話が弾む中、服部氏はお店で改造したトランペットを持ち出してきた。ジャズ仕様で改造された楽器だ。この改造を手がけたのが若き職人の福田優生氏。改造する元の楽器は台湾製の安価の楽器であったが、実際に試奏してみると非常に吹きやすく、滑らかなサウンドで驚いた。安価であっても職人の手が入れば良いものへと変わっていくのだ。もちろん限界はあるだろうが、常に良い状態を保つということの大切さを教えられた。



岡山という地にリペア専門の楽器工房がある、そしてそのこだわり、筋金入りの信念、まさに「楽器のプロ」である。こういうお店の存在が岡山市内、県内の音楽シーンを支えているのだと私は感じる。良き技術者が学び舎を巣立ち、地元に戻り修理、リペアという分野で地元を支える、誠に素晴らしいことであると思う。きっと市内の音楽家たちにとって非常に重要な情報と楽器の発着基地になっていることだろう。そして素晴らしいことは、この若き職人たちはまだ20代30代前半であるということだ。この若き職人、「楽器のプロフェッショナル」たちが岡山を舞台に存分に活躍し、

音楽シーンを支え続けることを切に願うものである。それが叶えば10年、20年、30年、40年後の岡山の音楽シーンは更に豊かなものへと育っていくであろうと思うのだ。そのことを期待したいと思う。

岡山に関わって2年ほど経つ。岡山という新旧が同居している魅力的な街、まだまだ面白く興味深い大切なものがたくさん眠っているように思えてならない。また機会をみてたくさん散策をしてみようと思う。

山口県出身の私は若い頃、活動の場は東京しかない、そのように思っていた。確かにプロ活動をしていくためには東京は重要である。だが東京だけが活動の場ではなく、岡山で出会ったこの若き技術者のように地方にも活躍の場、活動の場があることを教えられた。私の仕事ももう既に東京だけではなく、地方での仕事が増えてきて地方の良さというものを自分の眼で見て、自分の足で街を歩き、自分の肌で感じる事が大切だ。しっかりと地方、またあるときは海外にもアンテナを張り続けていたいと思う。

(こにし・てつろう 本会 理事)  
 タイトルロゴ・イラストレーション：  
 前川久美子 (日本出版美術家連盟 賛助会員)

\* 右の写真は私、小西がプロデュース、アートディレクションをした岡山での水と緑のアートプロジェクト 25AIRの朝日新聞の記事になります。



## ～より豊かな音楽の未来をめざして～

2003年から始まった『Fresh Concert』も、今年で12回目を迎えました。本会には通算で20回を優に超える息の長い企画も少なくないので、12回程度では、まだやっと青年期を迎えたといったところでしょうか、それでも、毎年新しい人を発掘し、舞台に立ってもらったこの企画には、いつも新鮮かつ未知なものに触れられるという、他の企画にはない楽しさがあります。今年も10組、16人の若い音楽家たち、伴奏者を加えると21人の人たちが舞台に立ち、初々しい演奏を聴かせてくれました。すべての主演者にとって、このコンサートへの出演は初めてですが、伴奏者の中には過去に何度か出演した顔なじみの人もおりました。編成面でも、声楽のソロ5、ピアノソロ2、チェロのソロ1、それと木管のアンサンブル1、ピアノ四重奏1となかなか多彩でした。残念ながら来場者は124名とかなり少なく、集客面で課題を残しましたが、演奏は例年になく粒ぞろいで、聴衆のみなさんが、かなり満足されて帰ったことは、アンケートの回答からも推察できます。

コンサート終演後、錦糸町駅前テルミナのレストラン『土間土間』で、打ち上げが行われました。グループで参加した人たちが、都合で全員参加出来なかったため、参加者は出演者が声楽4名、ピアノ1名の5名、会側は理事長の北川暁子さんを含め5名で計10名だけでしたが、世代の壁を越えて音楽の話題を中心に熱く語り合い、時間が過ぎることを忘れるほど、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

以下に、各演奏について実行委員長である私の寸評を記載します。あくまでも私の個人的感想ですので、気楽にお読みください。なお、演奏写真は、グラビアページに掲載されておりますので、そちらも併せてご覧いただきたいと存じます。

①千葉一喜(S\_Sax.) / 石田慎(A\_Sax.) / 岡田恵実(T\_Sax.) / 岩岡翔子(B\_Sax.)  
「マウンテン・ロード」より序章と終章 〈サクソフォーン4重奏〉

昨年のコンサートでも、現メンバーの先輩に当たる国立音大のサクソフーン四重奏団が、彼らの師匠に当たる雲井雅人氏と関係の深いマスランカの作品を演奏しましたが、今年も同作曲家の「マウンテン・ロード」を演奏しました。特に生命のエメルギー感じさせる、激しく躍動する楽想と、それとは対照的な祈りを感じさせるコラール風の楽想が現れる終章では、息の合った演奏で、楽想の対比がもたらす作品の魅力をよく引き出していました。

卒業後、同じ仲間と一緒に演奏する機会は、なかなか訪れないかもしれませんが、この日仲間たちと共に味わった音楽する喜びを心に刻み、精進して欲しいと願っています。

②池田 史花(ソプラノ) / ピアノ : 伊藤 眞祐子

モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』より “もうお分かりですわね、誰が名誉を”  
グノー 歌劇『ロミオとジュリエット』より “私は夢に生きたい”

一曲目のドンナ・アンナのアリアも、破綻なく美しく歌っていましたが、可愛らしいジュリエッタのワルツ“私は夢に生きたい”は、この人のキャラクターに相応しく、さらに魅力的に感じました。最高音の三点二音が上がりきらないなど技術的な問題も少々ありましたが、この人からは近未来において素晴らしいリリック・ソプラノに育って行く素質を感じました。演技、衣装をともなった、本物のオペラの舞台上で、改めてこの人の歌を聴いてみたいと思います。

③落合 真悟 (チェロ) / ピアノ : 井出 久美子

サン＝サーンス アレグロ・アパッショナート 作品 43

この人の音楽には、まだ荒削りなところもありますが、テンポ感のある生き生きとした音楽を奏で、聴く人を魅了しました。そして拙いチェロ演奏では、とかく痩せがちになりやすい高音域の音を艶やかに響かせてくれました。まだ高校生で、「いままでの野球中心の生活から、最近になってチェロの勉強に専念するようになった」という本人の言葉が信じられないほど、豊かな音楽性の萌芽を感じさせる演奏でした。またピアノの井出氏が若いチェリストをよくリードし、メリハリのある音楽に仕上げてくださいました。

④宮城島 康 (バリトン) / ピアノ : 金森 大

ヴェルディ 歌劇『ドン カルロ』より “カルロよ、よく聞いて”

ロッシニーニ 歌劇『セビリアの理髪師』より “私は町の何でも屋”

この人はすでに恵まれた素晴らしいバリトンの声を持っています。『ドンカルロ』のロドリーゴのアリアは、若い彼にとってそれを表現するにはまだ荷が重すぎるかなという感じもありましたが、『セビリアの理髪師』のフィガロのアリアでは、声もよく通り、役柄の性格をよく引き出しており、面目躍如の感がありました。この人は、いまずぐでも舞台に立たせてみたいほど、オペラ歌手としてのよい資質を備えています。

⑤稲垣有芽乃 (ピアノ) ラフマニノフ 楽興の時 作品 16 第 1、第 4 番

彼女は物憂い哀愁を漂わせる変口短調第 1 番と、激しくそして華麗なホ短調第 4 番を並べて演奏しましたが、この選曲は本人に思うところがあることと推察しております。前者の繊細で優しいロマンティシズムと、後者の感情が前面に溢れ出る情熱的なロマンティシズムは、彼女の心に内包されているものでもあると思います。それがしっかりした演奏技術を伴って表現されたので、聴く人の心に訴えかける演奏になったと思います。さらなる精進を重ね、自分の音楽を高めて行って欲しいと願います。

⑥澤辺明音 (Pf.) / 廣瀬奈津美 (Vln.) / 松岡百合音 (Vla) / 石崎美雨 (Vc.)

メンデルスゾーン ピアノ四重奏曲 第 3 番 口短調 作品 3 より 第 4 楽章

東京芸術大学の学生たちが、自分たちよりさらに若い時に作曲したメンデルスゾーンの作品に挑戦する興味深いアンサンブルでしたが、初々しく澁刺としていて躍動感に溢れる音楽を奏でてくれました。また、メリハリが利いた演奏で、楽曲構造も良く聴き取れました。もし、注文をつけるとするなら、メンデルスゾーンの音楽が内包する、優雅さ、繊細がいまひとつ表現し切れていない感がありました。しかし、それには、更なる研鑽が必要でしょう。ともあれ、聴く者の心を浮き立たせる、楽しい演奏でした。

⑦中川 香里 (メゾ・ソプラノ) / ピアノ : 松田 怜

R. シュトラウス 歌曲 “万霊節” 作品 10-8

チャイコフスキー 歌劇 『オルレアン少女』より “さらば森よ”

この人は、幅広い声域において、美しく豊かな声を発することが出来る人です。その特性が歌曲でもオペラのアリアでも発揮されていました。しかし、声の質からすると、メゾ・ソプラノというより、中域や低域もしっかり歌えるソプラノという感じがしました。“さらば森よ”では、とても豊かで表現力のある歌を聴かせてくれました。役柄が合えば、ソプラノの役とメゾ・ソプラノの役の両方がこなせそうです。自分の技術と表現にさらに磨

きをかけて行けば、幅広い役がこなせる頼りになる歌手として、オペラ界でも重宝される存在となりうる可能性があります。また、ドイツ歌曲の世界でも活躍できそうです。

#### ⑧山本 有紗（ピアノ） プロコフィエフ ソナタ 第1番 作品1

山本さんも⑥の芸大グループがそうであったように、大家が演奏者より若い年代に書いた作品への挑戦です。この人の演奏でまず感じたことは、指がしっかりしており、紡ぎ出すその音楽は輪郭が明瞭で、右手、左手のバランスも良いこと、また音楽を捉える力において並々ならぬものを持っているようで、作曲者の音楽的構成意図が、よく伝わって来る演奏を聴かせてくれました。これだけ確かな音楽的把握力をもっていれば、様々な時代様式の作品、また室内楽、伴奏など多様なジャンルで活躍できる素養を備えている人と推察しています。これからも自分の音楽に磨きをかけ、活動の幅をさらに広げ、自分の才能を開花させて行って欲しいと願っています。

#### ⑨宮地 江奈（ソプラノ）ノピアノ：藤川 志保

R. シュトラウス 歌曲 “アモール” 作品 第68-5  
マスネ 歌劇『マノン』より “私はどんな道でも”

“アモール”と“私はどんな道でも”は、いずれもコロラトゥーラの技術が華やかに発揮される声楽曲です。彼女は、どちらも、美しい発声で華やかに歌ってくれました。もちろん、高い三点二音も難無くこなしていました。この人は、天性において、コロラトゥーラ・ソプラノの声を持っているようです。例えば、一昨年の本会オペラ公演の演目だった、オッフェンバック作曲の『地獄のオルフェ（天国と地獄）』のユリディス役や、R. シュトラウスの『ナクソス島のアリアドネ』のツェルビネッタ役などで、舞台に立って歌うところを聴いてみたいと思います。

#### ⑩三木 佑真（テノール）

ピアノ：藤川 志保

プッチーニ 歌劇『トスカ』より 1. “たえなる調和” 2. “星は光ぬ”

三木君はなかなかの美声の持ち主で、容姿もオペラにおいて二枚目役を演ずるのに向いていると思います。“たえなる調和”では、甘く心地よい美声のテノールの魅力を聴かせてくれましたが、“星は光ぬ”では、もっとドラマチックかつ悲劇的な表現が必要で、そういう点でやや物足りなさも感じました。素質の面ではいいものを持っているようですが、いま一つ声が抜けていないという感じもあります。声楽家として成長途上にある人と言えましょうが、こういう人が発声のコツを掴み、声が抜けるようになり、テノール歌手として大成した例を知っています。この人も、そういう可能性を十分に秘めています。

今回は、紙面の制約があり、各の人について、ごく短い一口批評だけ書きましたが、総評すると、今回の出演者は将来的に楽しみな人ばかりでした。その中で、大きく開花する人、地味ながら有意義な活動を行く人など、将来の道は様々でしょうが、夢と勇気を持ち続けながら、音楽の道に精進して欲しいと願っています。

また、主演者を支えた伴奏者にも、音楽経験を積んだ優れた音楽家が多かったですし、出演者を指導して下さった指導者の方々、コンサートを支えて下さった、裏方の方々、若い方の演奏に暖かい拍手で答えた下さった聴衆の皆様へ感謝を申し上げ、今回の成果と反省点を今後に活かして行きたいと思っています。

（コンサート実行委員長 中島 洋一）

### (公社) 日本尺八連盟が伊勢神宮で式年遷宮奉納演奏

昨年10月に行われた伊勢神宮式年遷宮を祝し、(公社)日本尺八連盟は4月6日に伊勢神宮内宮参集殿にて奉納演奏式典を催し、今回で38回を迎える永年功績者顕彰式及び竹師冠称允許状並びに昇格免許状授与式を行った。

奉納演奏式典当日の朝は、気温はやや低かったが春の陽気で、清々しくよく晴れ渡り、神宮の樹木もしっとりとして佇み、足を踏み入ると石砂利の音も心地よく聞こえた。式典は朝8時から内宮の新築された正宮御垣内の参拝に引き続き、移動して神楽殿での御神楽奉納を觀賞。神楽殿内の通路には一般には観られない「書」や「陶器・漆器」等の陳列がされていて、神楽觀賞までのプロムナードとして、眼を楽しませる趣きがあった。

いよいよ都山流尺八奉納演奏であるが、それは参集殿能舞台で会長の坂田誠山氏の独奏により都山流尺八本曲(規範曲として作曲される)「岩清水」が献曲された。この作品は、流祖中尾都山の作品であるが、都山流の守護神である京都石清水八幡に因んで作曲された。式年遷宮奉納演奏献曲としては最適と思う。

2曲目は参加された永年功績者・免許状授与者40名全員による「瀬戸の舟唄」が奉納献曲として演奏された。気迫の籠った良い演奏であった。

伊勢神宮での式典が終了したのちは、道路を挟んで向かい側にある「伊勢青少年研修センター(伊勢道場)」へ戻り、“第38回永年功績者顕彰式典並びに免許状授与式典”が行われた。

冒頭に会長の坂田誠山氏が「日本の伝統に重きを置いて、その上に新しい尺八文化を築く」という話をされた。その後表彰に入り、永年功労者で表彰される30年以上の方々は、実際の被顕彰者数は80名であるが、代表参加者としてその内の14名が40年・50年・55年・60年迄各年代別に表彰された。

竹師(最上級者)冠称被允許者は7名だが、代表として中本遥山氏が表彰された。昇格認定者は大師範代表として喜多蓬山氏・池内宗山氏他11名・師範代表として中山隆山氏・田邊烽山氏他1名の表彰があった。

今回大師範の昇格認定された池内宗山氏は副会長の池内修山氏のご子息であり弟子である。認定者として名前を読み上げる修山氏の胸の内は幾ばかりか。

この後、25年度全国コンクールの独奏部門・アンサンブル部門の優勝者による披露演奏があり、全員の合奏で「春うらら」の演奏で式典の幕を閉じた。

閉会に先立ち副会長池内修山氏から「この榮譽をもって地元にかえり尺八の普及に努めてほしい」とのコメントがあり、常務理事・運営委員の方々からも式典の成功の感想が述べられた。(副会長の永田憲山氏は参加したが、体調不良のため欠席。)この榮譽ある式典を礎に更なる発展を期待する。

高橋雅光(作曲)

＜歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品＞

## 日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

親愛なる読者のみなさんこんにちは。

このコーナーは本会が会員特典として作曲会員の作品を楽譜浄書製作・印刷して広く宣伝普及および紹介していくことや、演奏する機会を設けることと、楽譜を完全な形にして作曲家の生涯の仕事の成果として残していくことは、日本の音楽文化創成としても意義のあることとして発足しました。

今回は金籐豊氏の作品で、‘60年代～70年代にかけて作曲者が新しい音楽を求めていた若い頃に出会った前衛音楽。その中であって、自分らしい音楽の在り方を求めて葛藤していた頃の作品として、「フルート・ヴァイオリン・チェロのための三重奏曲」をご紹介しました。日本の音楽家ならば誰でも経験する東西の音楽の葛藤。日本の音楽文化の創成過程の1ページ。是非楽譜をごらんになって演奏してみてください。

今回ご紹介する作品は、今年の2月に本会から発行されました橋川琢作品のピアノ小曲集です。この作品は本誌4・5月合併号で紹介する予定でしたが、満載のため今月号でご紹介することになりました。

### 橋川 琢作品

抒情組曲＜日本の<sup>こみち</sup>小径＞ 第一集 (1999年—2013年)

「夏風の<sup>とき</sup>刻」 op12 for Piano solo

1、 瑠璃の雨 2、夏の<sup>つが</sup>柵池 3、夏風の刻 4、風夢 5、秋を待つあいだ

という5曲の小品からなる曲集で、作曲者の心になにげなく、しかし忘れずに残っている日本の自然や路地・小径の風景。その原風景と重なるように湧き上がる遠い記憶と郷愁。それらを心象風景として表した作品。(初級～中級位)

A4版 27頁 定価(本体価格2,000円+消費税)

この曲集のテクニク度は、ツェルニー100番位の演奏力で弾ける内容なので、小学生高学年～大人まで楽しめる作品になっています。

曲想は、全曲を通じてウエットな哀愁を帯びた抒情的な感性が流れていて、大人には懐かしい郷愁を感じさせ、子供には哀愁を帯びたお話しに聞こえるのではないかと思います。

しかし、曲集としては“夏”がテーマなのだから、もう少し曲想やリズムに変化があっても良かったのではないかと、つい欲張ったことを希望したりしますが、そ

れぞれを単独の曲としてみた場合は、十分説得のある作品になっていて、こどもからおとなまで楽しめます。また、コンサート等のアンコール曲としても最適と思います。

特にこの作品は、須賀田磯太郎という（明治40年～昭和27年45歳で他界）ドイツ音楽を勉強された作曲家が、「今この美しい原風景を音楽に表しておかないと、もう同じようには描けないだろう」と交響詩「横浜」を作曲し、日本の情感を表出したこの作品に影響を受け、自分が感じられる今の日本の原風景を音にとどめておきたいという趣旨で作曲しました。

### <作曲者紹介>

作曲作品は、楽譜を通じて観る事が出来たり、聞く機会があったりしますが、作曲家本人は、表面になかなか出て行きにくいところがあるので、こういう機会に思いっきり前面にでて頂こうというのが、このコーナーの主旨です。

橘川琢氏が語るところによると、「両親が音楽好きということもあって、幼少のころからピアノに親しんでいましたが、高校生くらいのときから作曲（主に器楽曲）をポツリ・ポツリと始めていました。

作曲の勉強が変化をしたのは20代後半28～29歳になってからでした。作曲家三木稔氏に師事したことが、三木氏が書かれた“日本楽器法”を勉強するきっかけになり、後に三木氏が提唱した「オーラJ」という、日本の伝統楽器による演奏集団に参加することによって、実際に日本の伝統楽器に触れる機会にも恵まれました。

また三木氏が独自のハーモニーを作って作曲をしていることに刺激を受けました。それから間もなく、本会代表委員の助川敏弥氏にも作曲を師事、主に和声法・対位法・管弦楽法を習い現在に至っています。

音楽については、音楽療法専門士という立場からも、人への音楽の“存在価値”はどうあるべきかを追求しています。音楽は演奏する人や聞いてくれる人と時間や命も含めて共有することであり、その瞬間の幸福感を共有し大切にしたい。作品もまたそういう作品でありたいと思います。

また、音楽と他の分野の芸術とのコラボレーションについても興味があり、“美”という観点から今後も共作を進めていきたいと思っています。」と語っていました。これから40歳を迎えて、作曲することも、どのように生きるかということも難しい年代に入っていきますが、良い夢を追い続けて頂きたいと思います。

出版局楽譜出版部 高橋雅光

# I. 瑠璃の雨 (2000年)

Azure Rain

作曲：橘川琢

Composed by Migaku KITSUKAWA

misterioso (♩=90)

*sva*

The first system of the musical score for 'Azure Rain' consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 4/4 time signature. It begins with a mezzo-piano (*mp*) dynamic and a piano (*p*) dynamic, featuring a melodic line with a fermata. The lower staff is in bass clef with the same key signature and time signature, starting with a mezzo-piano (*mp*) dynamic and a melodic line. The system concludes with a mezzo-piano (*mp*) dynamic. A dashed line labeled *sva* spans the first two measures of the upper staff.

The second system of the musical score continues from the first. The upper staff starts at measure 5 with a piano (*p*) dynamic and a mezzo-piano (*mp*) dynamic, featuring a melodic line with a fermata. The lower staff continues with a mezzo-piano (*mp*) dynamic. A dashed line labeled *(sva)* spans measures 5 through 8 of the upper staff. Another dashed line labeled *sva* spans measures 9 through 12 of the upper staff.

The third system of the musical score begins at measure 10. The upper staff features a piano (*p*) dynamic and a mezzo-piano (*mp*) dynamic, with a melodic line and a fermata. The lower staff continues with a mezzo-piano (*mp*) dynamic and a piano (*p*) dynamic. A dashed line labeled *sva* spans measures 10 through 13 of the upper staff. Another dashed line labeled *sva* spans measures 14 through 17 of the upper staff.

The fourth system of the musical score begins at measure 16. The upper staff features a mezzo-piano (*mp*) dynamic and a pianissimo (*pp*) dynamic, with a melodic line and a fermata. The lower staff continues with a mezzo-piano (*mp*) dynamic. A dashed line labeled *(sva)* spans measures 16 through 19 of the upper staff. Another dashed line labeled *sva* spans measures 20 through 23 of the upper staff.

29

*pp* (cluster)

*mp*

*gva*

*gva*

**Allegro** (♩=120)

*p*

*gva*

(*gva*)

41

*f*

*p*

*gva*

コンサートプログラム

# 華麗なる響宴 2014

日本音楽舞踊会議ピアノ部会第27回公演

2014年6月13日(金)

18:15 開場 18:45 開演

東京オペラシティ リサイタルホール

「日本音楽舞踊会議」は、音楽および舞踊の専門家による総合文化団体として、半世紀以上絶え間なく音楽・舞踊の魅力を探求し、機関誌や会員による公演を通して皆様にお届けしております。「華麗なる響宴～2014」はピアノ部会会員を中心に第27回目の演奏会です。ピアノソロ、室内楽など、様々な作曲家による珠玉の作品の数々を、第一線で活躍する演奏者達の熱い演奏でお楽しみください。

実行委員長 山下 早苗

実行委員 小崎 幸子

日本音楽舞踊会議 代表理事 助川 敏弥

深沢 亮子

日本音楽舞踊会議 理事長 北川 暁子

ピアノ部会長 戸引 小夜子

主催：日本音楽舞踊会議ピアノ部会

後援：日本音楽舞踊会議・月刊「音楽の世界」

八王子音楽院、一般社団法人全日本ピティナ指導者協会

## プログラム

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op. 27-2 「月光」  
Ludwig van Beethoven : Piano Sonata No.14 Op.27-2 C sharp minor "Moonlight"

廣瀬 史佳 Fumika Hirose P.

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調 Op. 49 第1楽章  
Felix Mendelssohn Bartholdy : Piano Trio No.1 D minor Op.49 mov.1

上埜 マユミ Mayumi Ueno P.  
小島 佐和子 Sawako Kojima Vn.  
片岡 香織 Kaori Kataoka Vc.

プロコフィエフ：ピアノソナタ 第3番 イ短調 Op. 28 「古い手帳から」  
Sergei Prokofiev : Sonata No.3 A minor Op.28 "From the Old Notebooks"

小崎 幸子 Sachiko Kosaki P.

フォーレ：ノクターン第6番 変ニ長調 Op. 63  
Gabriel Fauré : Nocturne No.6 re bemol majour Op.63

太田 恵美子 Emiko Ota P.

ドビュッシー：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ  
Claude Debussy : Sonate pour violon et piano

深沢 亮子 Ryoko Fukasawa P.  
中村 静香 Shizuka Nakamura Vn.

---

シューマン：3つのロマンス Op. 94  
Robert Schumann : Three Romances for Violin and Piano Op. 94

八木 宏子 Hiroko Yagi P.  
信田 恭子 Kyoko Shinoda Vn.

ショパン：バラード第1番 ト短調 Op. 23  
Frédéric Chopin : Ballade No.1 G minor Op.23

栗栖 麻衣子 Maiko Kurisu P.

ラヴェル：「鏡」より ” 道化師の朝の歌”  
Maurice Ravel : "Miroirs" Alborada del gracioso

原口 摩純 Masumi Haraguchi P.

助川 敏弥：山水図  
Toshiya Sukegawa : Landscape

サン=サーンス：Op. 52-6 ワルツ形式によるエチュード  
Camille Saint-Saëns : op.52-6 En Forme de Valse

戸引 小夜子 Sayoko Tobiki P.

リスト：スペイン狂詩曲  
Franz Liszt : Rhapsodie espagnole

北川 暁子 Akiko Kitagawa P.

## 出演者プロフィール



### 廣瀬 史佳 Fumika Hirose ピアノ

桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業。山梨県芸術祭賞、山梨県芸術祭実賞受賞。ソレイユ新人オーディション、日本ピアノ教育連盟オーディション、KOBE 国際学生音楽コンクール等入賞。国内外のマスタークラスを受講し研鑽をつむ。オランダ大使館にて、リスト国際コンクール主催の演奏会、音楽評論家・真嶋雄大氏による音楽講座、新宿・朝日カルチャーセンターレクチャーコンサート、打楽器奏者・池上英樹氏と富士山河口湖音楽祭等出演。アダルベルト・スコッチ、ウィーン・ラズモフスキー弦楽四重奏団等、海外のアーティストとの共演も多数。ソリスト、室内楽奏者として活動する傍ら、後進の指導にもあたる。日本音楽舞踊会議青年会員。



### 上埜 マユミ Mayumi Ueno ピアノ

北海道出身。3歳よりピアノを始める。北星学園女子高等学校音楽科卒業。国立音楽大学演奏学科卒業ピアノコース修了。ポーランドショパン音楽院サマーセミナーにてディプロマ取得。これまでに、渡辺卓、浜尾夕美、戸引小夜子、エフゲニー・ザラフィアンツ、イェジエイ・ロマニウクの各氏に師事。現在は伴奏や室内楽、エレクトーンオーケストラとの共演をはじめ、小林樹氏の楽曲初演に関わるなど幅広く活動している。日本音楽舞踊会議青年会員。



### 小島 佐和子 Sawako Kojima ヴァイオリン

3歳よりヴァイオリンを始める。東京都立芸術高等学校を経て、東京音楽大学卒業。卒業後、東京音楽大学校友会主催千葉県新人演奏会出演。第26回江戸川区新人オーディションにて弦楽器部門1位合格。新人演奏会、江戸川区音楽祭に出演。翌年、親子コンサートにて江戸川フィルハーモニーと共演。第20回日本クラシック音楽コンクール一般の部第2位(最高位)。入賞者披露演奏会<ガラコンサート>出演。今までにヴァイオリンを富川歆、掛橋佑水、村瀬敬子、野口千代光、佐藤良彦、若林暢の各氏に師事。現在、柏屋楽器ヴァイオリン講師。江戸川演奏家協会会員。TIAA フィルハーモニー、クラシックオーケストラ登録団員。



### 片岡 香織 Kaori Kataoka チェロ

東京音楽大学卒業 チェロを菅野博文、苅田雅治、三森未来子、室内楽を横山俊朗、河合訓子、各師に師事。TIAA 全日本クラシック音楽コンサート室内楽にて入選。神戸音楽の街選抜コンサート出演。T.ヴァルガ氏のマスタークラスを受講。現在は、室内楽やオーケストラ、パーティーやブライダル、テーマパークでの演奏、ライブやテレビでのアーティストのサポート等、幅広い活動をしている。音楽教室やスクールオーケストラの講師として、後進の指導にあたっている。



### 小崎 幸子 Sachiko Kosaki ピアノ

東京都出身。国立音楽大学附属中・高等学校を経て、同大学卒業。ピアノ・音楽研究会 DOLCE を主宰しピアノ教育の研究と指導を行う。他に、豊で潤いある生活のための音楽の輪を広げようと、音楽を楽しむ会を主宰し子育て支援のためになど様々なコンサートや勉強会をプロデュースする。また夜の会演奏会、エレクトーンとのコンチェルト共演、邦楽やマリンバ奏者と国内外のコンサートに参加するなど意欲的に演奏活動もする。更にエフゲニー・ザラフィアンツ氏のレッスンも受けるなど演奏の勉強を続けている。これまでにピアノを戸引小夜子、安部和子、木村浩子の各氏、声楽を山田純彦氏に師事。東大和市音楽連盟、日本音楽舞踊会議会員。



### 太田 恵美子 Emiko Ota ピアノ

国立音楽大学付属中学校、高校を経て、同大学ピアノ科卒業。桐朋学園講師。二期会ロシア歌曲研究会ピアニスト、東京コールフェライン・ピアニストを経て、現在、日本音楽舞踊会議会員。東京交響楽団、上智大学 OB オーケストラとのコンチェルト、チョボタリョフの「ポエマ」の初演、文化庁の地方公演、歌曲、コーラス、器楽の伴奏を努める。スイスの日本大使館、ドイツのコンセルヴァトワール、デンマークに於いてコンサートを開催。NPO「少年ケニア」会員として、調布市の後援を受けて毎年、チャリティー・コンサートを行っている。A・アレックス、伊東うた、瀬川岬子の各氏に師事。日本音楽舞踊会議会員。



### 深沢 亮子 Ryoko Fukasawa ピアノ

15歳で日本音楽コンクール首位受賞。17歳でウィーン国立音楽大学へ留学し、1959年首席で卒業。デビューリサイタルを楽友協会ブラームス・ザールで行い絶賛される。1961年ジュネーヴ国際音楽コンクール1位なしの2位。以来ヨーロッパや南米、アジアの主要ホールでリサイタル、室内楽、協奏曲のソリストとして活躍。オーケストラとの共演ではL.マタチッチ、G.ヴァント、小澤征爾他の指揮者の元でN.Ö.トーンクンストラ管弦楽団、N響、東京交響楽団他と定期公演等で演奏。又日本の作品を海外へ紹介し、国際音楽コンクール、日本音楽コンクール他の審査員も務める。CD、著作、楽譜の出版多数。2013年9月、デビュー60周年記念演奏会を東京で催す。日本音楽舞踊会議代表理事。日本演奏連盟理事。



### 中村 静香 Shizuka Nakamura ヴァイオリン

桐朋学園大学音楽学部を首席で卒業後、文化庁芸術家派遣在外研修員としてジュリアード音楽院に留学。第52回日本音楽コンクール第一位。及び増沢賞、レウカディア賞、黒柳賞受賞。第29回海外派遣コンクール特別表彰。これまでにNHK交響楽団等、各オーケストラと共演し、各地の音楽祭にも出演している。2003年に大垣音楽祭でヴィオラのソロ・デビューを果し、その後はヴァイオリンとヴィオラ双方で活躍の場を広げている。「シューベルティアデー〜ピアノ：深沢亮子」等のCD

をリリース。現在、桐五重奏団、水戸室内管弦楽団、サイトウ・キネン・オーケストラのメンバー。東京音楽大学准教授、フェリス女学院大学非常勤講師。日本音楽舞踊会議員。



### 八木 宏子 Hiroko Yagi ピアノ

東京芸術大学ピアノ科卒業、専攻科修了。水谷達夫教授に師事。読売新人演奏会出演。国立ケルン音楽大学ワインレーベ教授に師事。1982、86、98年にリサイタル。1985年ナイロビ婦人年会議フェスティバルでリサイタル。1984～90年まで毎年ケニア各都市でチャリティーリサイタル。2000、02年にドイツのケルンで日本作品を紹介。近年は室内楽を中心に活動。日本音楽舞踊会議員。



### 信田 恭子 Kyoko Shinoda ヴァイオリン

桐朋学園大学卒業、同年4月ドイツ留学。ベルリン音楽大学卒業、ディプロマ修了後、ドレスデン音楽大学・大学院を首席で卒業し、さらにマイスター・クラスに進み研鑽を積む。1997年サン・バルトロメオ・アルマーレ国際音楽コンクール入賞。ベルリン日独センターや在独日本大使館主催の公的演奏会に多数出演。ドレスデン・シンフォニカー旗揚げコンサート、CD録音等にも参加。また、アマチュアオーケストラとのパリでの演奏会では、ソリストとして出演。2000年に約8年に及ぶ留学に終止符をうち帰国。帰国後もベルリンやウィーン・シュテファン大聖堂、聖ペーターズ教会での演奏交流も続けている。



### 栗栖 麻衣子 Maiko Kurisu ピアノ

日本大学芸術学部ピアノコース卒業後ウィーンへ留学。ピアノ演奏および教育法について研鑽を積む。国内外にいて数々のマスタークラスを受講、コンサート出演。第32回家永ピアノオーディション合格。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。現在各地でソリスト、アンサンブルピアニストとして演奏活動を行う傍ら、コンサートプロデューサーや後進の指導に携わっている。ヴィクトル・トイフルマイヤー、深沢亮子ほか各氏に師事。国際芸術連盟専門家会員、日本音楽舞踊会議理事。



### 原口 摩純 Masumi Haraguchi ピアノ

グラーツ国立音大を一等賞卒業、グラーツ市より奨学金。ウィーン国立音大大学院修了。ピアノ室内楽においてマギスター修得。ロンドン王立音楽大学演奏家ディプロム(A・R・C・M)。ベルギー、イタリア、ドイツのコンクールで優・入賞。ドイツ国立イェナ交響楽団とピアノ協奏曲を共演。グラーツ国際音楽週間に出演他、国際的演奏家との共演、レコーディング多数。NHK-FM出演。ソロ・コンサートのテレビ放送。CDは、音楽之友社「ステレオ」誌の優秀録音。「ブランディス&原口摩純デュオ・リサイタルライブ」はレコード芸術誌の準推薦盤。荒憲一、深沢亮子、エバート、ヴォルフに師事。東洋英和女学院大学講師。日本音楽舞踊会議員。



### 戸引 小夜子 Sayoko Tobiki ピアノ

東京都出身。国立音楽大学器楽科、専攻科修了。NHK オーディションに合格し「コンチェルトの夕べ」にラフマニノフ第2番で出演。1996年飯塚シニア音楽コンクールピアノ部門1位。N・Yカーネギー・ホールにてジョイントリサイタル。サン・ノゼ市にてリサイタルを開催。2002年ペテルブルグにてグリーク・コンチェルト演奏等。東京にてもりサイタルを開催し、邦人作曲家の作品（発表）演奏にも意欲的である。飯田和子、青木和子、水谷達夫、S. ドレンスキー、ウラジーミル・竹之内の各氏に師事。国立音楽大学ピアノ科講師を経て、現在、国立音楽大学附属中、高校評議委員、「夜の会」主管、日本音楽舞踊会議副理事長。



北川 暁子 Akiko Kitagawa ピアノ 1950年L.コハンスキー教授に師事。1964年イイノホールで第1回リサイタル。1967年武蔵野音楽大学卒業、ウィーン国立アカデミー入学。R.ハウザー教授に師事。1969年ブゾーニ国際コンクール第3位。ウィーン国立アカデミーを全教授一致の最優秀で卒業。ベーゼンドルファーコンクール優勝。1970年ミュンヘン国際コンクール第2位（1位なし）。帰国後、毎年リサイタル開催。1984年演奏活動20周年記念ベートヴェンソナタ全32曲連続演奏会。1989年千本博愛、北川靖子と「セルヴェ・トリオ」を結成。1995年演奏活動30周年ブラームスの夕べ（5夜）開催。2011年から2012年にかけて、3度目のベートーヴェンピアノソナタ全曲演奏会を開催。東京芸術大学名誉教授、日本音楽舞踊会議理事長。



## 曲目解説

♡ ベートーヴェン：ピアノ ソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op. 27-2 「月光」

1801年(31歳)に完成した作品で、当時、恋心を寄せていた14歳年下の伯爵令嬢G. ギィチャルディに献呈された全3楽章からなる「幻想曲風ソナタ」。静寂な1楽章、穏やかな希望の光を感じる2楽章、情熱的で嵐の様な3楽章。一途なベートーヴェンの愛を拒んだギィチャルディ…、彼にとってどれ程の打撃であっただろうか。悲しみ、苦しみ、痛み、怒り…もしかしたら、ベートーヴェンの心の叫びを表現した作品なのかもしれない。(廣瀬史佳)

♡ メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 二短調 Op. 49 第1楽章

メンデルスゾーン作曲のこの曲は、当時30歳だった1839年9月23日に完成し、ライプツィヒで初演された。ピアノの達人だったメンデルスゾーンらしく、演奏には高度な技巧を要する。この曲を聴いたロベルト・シューマンは「ベートーヴェン以来最も偉大なピアノ三重奏曲」だと評し、メンデルスゾーンを「19世紀のモーツァルト、最も輝かしい音楽家」だと称えた。(上埜マユミ)

♡ プロコフィエフ：ソナタ第3番 イ短調 Op. 28 (古い手帳から)

1907年に作曲されたイ短調のソナタをもとに1917年に改訂され、1918年ペトログラード（現サンクトペテルブルク）でプロコフィエフ自身のピアノで初演。第4番とともに「古い手帳から」の副題を持つ。アレグロ・テンペスト、イ短調、4分の4拍 - 8分の12拍子。冒頭に二小節打ち付けるようなアタックの前奏でダイナミックに始まる。動きのある第1主題と素朴な感じの第2主題、再現部では第1主題も第2主題も現れず推移部のみ行っている変則的なソナタ形式となっている。

（小崎幸子）

### ♥ フォーレ : ノクターン第6番 変二長調 Op. 63

この曲は、第7番とともにフォーレの最高の作品である。感情を非常に上品に抑制した音楽的発想の華麗さ、構造と書式の完成度の高さ、幻想的な面と音楽の実質的な根拠によって、最高の作品に位置する。

冒頭から重々しく、輝かしく、古代立像の堅固な大理石のようなすばらしいフレーズが現れる。三連符で形作られた和音群、完全和音や七の和音が、美しい本体に屈折しながら調和して行く。（太田恵美子）

### ♥ ドビュッシー : ピアノとヴァイオリンのためのソナタ

晩年ドビュッシーは、さまざまな楽器の組み合わせで6曲のソナタを書く積りだったが、3曲目のこの作品が最後のものとなってしまった。健康状態が思わしくないなかで仕事をし、1917年5月、サール・ガヴォにて作曲者自身のピアノ、G. プーレのヴァイオリンで初演。曲はドビュッシーの妻エンマに献呈された。

第1楽章はAllegro Vivo。第2楽章 間奏曲、幻想的で軽快に、と記されている。第3楽章はトレ・ザニメ。古典的な性格をもつソナタだが、不気味さ、皮肉、不安、孤独が感ぜられる。（深沢亮子）

### ♥ シューマン : 3つのロマンス Op. 94

シューマン（1810 - 1856）のドレスデン時代1849年の作品で、オーボエ（あるいはクラリネットかヴァイオリン）で演奏するように書かれている。シューマンの艶やかなメロディーが魅力的に流れて、落ち着いた美しさを表している。

1, 速過ぎず (Moderato)

2, 単純に、愛情こめて (Simplice, affettuoso)

3, 速過ぎず (Moderato)

（八木宏子）

### ♥ ショパン : バラード第1番 ト短調 Op. 23

ショパン初期の代表作であり、最もポピュラーな作品のひとつ。パリ滞在中の1831年～1835年に作曲され、1836年に出版、シュトックハウゼン伯爵に献呈された。ショパンの4つのバラードは、ポーランドの詩人アダム・ミツキエヴィッチの詩に靈感を受けて書かれたといわれることがあるが、特定の詩と音楽が一致する部分は第3番

に見受けられるのみで、純粹にピアノによる絶対音楽作品が目指されたと考えられる。(栗栖麻衣子)

### ♡ラヴェル：「鏡」より”道化師の朝の歌”

5曲から成る組曲『鏡』の第4曲。「この『鏡』は私の和声的進展の中でもかなり大きな変化を示し、それまでの私の作風に最も慣れ親しんでいた音楽家でさえ当惑したほどだった」と自伝に書き残している。ラヴェルの母がスペイン人であったことから、彼の楽曲の作風にはスペイン風のメロディ、リズムが色濃く表れている。めまぐるしく変化するテンポやコケティッシュなルバート。二重グリッサンド、高速連打などピアノの技巧も華やかに使われ、輝くような色彩感を醸し出している。

(原口摩純)

### ♡助川 敏弥：山水図

「山水図」は1975年から1978年にかけての作品である。長谷川等伯、円山応挙、などの日本画からつよい教訓を得ている。五音音階の構成音が相互に共鳴しあう独自の美しさには、箏など日本の伝統楽器から教えられたものが多い。なお、1978年の初版は、のちに1981年に改訂され多少短縮されている。(助川敏弥)

### ♡サン＝サーンス：Op. 52-6 ワルツ形式によるエチュード

サン＝サーンス(仏)(1835-1921)幼時よりピアニストとして才覚を現わし、パリ音楽院でオルガンと作曲を学ぶ。1871年国民音楽協会を設立し、その活動を通じて近代フランス音楽の基礎を築いた。作品はあらゆる分野にわたっている。6曲で1組のエチュードが3組あるが、いずれも名ピアニストが作曲しているので、超技巧的である。(戸引小夜子)

### ♡リスト：スペイン狂詩曲

19世紀には多くの作曲家がスペインの民俗音楽に魅了されて作品に取り込んだが、リストもその1人であった。リストは1844～45年にかけて演奏旅行でイベリア半島を回った際にスペインの民俗音楽を収集した。この作品では「フォリャ」と「ホタ」という2つの舞曲がヴィルトゥオーゾ的に描かれている。前半は定型化されたバスと和声進行に基づいた変奏曲形式の「フォリャ」、後半は北東部アラゴン地方を起源とする軽快な「ホタ」である。最後は前半の「フォリャ」が長調で再現されて華麗に楽曲を閉じる。(北川曉子)





# 会と会員の情報

## 1. CMDJ 会と会員のスケジュール

6 月

- 1日(日)ピアノ部会試演会【10:00~13:00 13時~15時・勉強会 戸引スタジオ】  
7日(土)日本音楽舞踊会議 理事会【19:00~21:00 事務所】
- 13日(金) 第27回ピアノ部会公演~華麗なる響宴2014~  
出演: 廣瀬史佳 上埜マユミ 小崎幸子 太田恵美子 深沢亮子 八木宏子  
栗栖麻衣子 原口摩純 戸引小夜子 北川暁子  
【オペラシティリサイタルホール 18:45 開演 全自由席 3500円】
- 14日(土) 橘川琢:作曲 詩と音楽を歌い、奏でる「トロッタの会」第19回  
La Nouvelle Chanson (op. 59) より「六月、今は遠く」(詩:木部与巴仁)  
作曲:橘川琢 【早稲田奉仕園リバティホール】
- 15日(日) 芝田貞子・高橋順子 「第15回平和のためのコンサート」  
講演:清水雅彦「国民の目・耳・口をふさぐ秘密保護法~その内容と狙い」  
歌:狭間 壮 ピアノ:はざま ゆか 重唱:アンサンブル・ローゼ  
めんこい仔馬・一本の鉛筆・花の街・歌の翼 他  
【牛込笹筒区民ホール 18:30 開演 2200円】
- 15日(日) 機関誌『月刊:音楽の世界』編集会議 【14:00~16:00 事務所】
- 27日(金) COMPOSITIONS 2014  
【ヤマハエレクトーンシティ渋谷メインホール19:00 開演 当日券 3,000円】  
(連絡先:実行委員長 西山淑子 03-3955-6249)
- 28日(土) 助川敏弥:作曲 作品初演「Sunset」Violin 版初演  
原曲はV'cello とピアノ版。今回は同一曲のviolin とピアノ版の初演。  
第45回アデカ富士通ジョイントコンサート。Violin 中野恵 ピアノ 船田桂子  
【日暮里サニーホール、コンサート・サロン 14:00 開演】
- 30日(月) 深沢亮子 翔の会公開レッスン  
【お問合せ:044-966-5224 (大山喬子様方) 10:00】

7 月

- 6日(日) 日本尺八連盟埼玉支部第37回定期演奏会  
高橋雅光作曲 尺八・箏・十七絃による大合奏曲「筑後川詩情」(箏・十七絃=柴田つぐみ社中) 【川越市メルトホール 14:00 開演 一般 3,000円】
- 7日(月) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」  
~昭和の幕あけ・思い出の歌たち&今ではもう日本の歌・そんな歌たち~  
出演:佐藤光政・浅香五十鈴・内田暁子・浦 富美・高橋順子・  
中村貴代・渡辺裕子 ピアノ:坂田晴美  
【すみだトリフォニー小ホール 14:30 開演 2500円(全自由席)】
- 18(金) 機関誌『月刊:音楽の世界』編集会議 【19:00~21:00 事務所】

8 月

- 9日(土) 深沢亮子 F. シューベルト・ソサエティー20周年記念コンサート  
ピアノ五重奏曲「鱒」ソナチネ No 1 他  
共演 瀬川祥子 (Vn) 永井公美子 (Vn) 田原綾子 (Va) 富岡廉太郎 (Vc)  
幣隆太郎 (Cb) 【日生劇場ホワイエ 14:00】  
お問合せ フランツ・シューベルト・ソサエティー (TEL 03-5805-6203)
- 26日(火) 深沢亮子 モーツァルト ピアノ四重奏曲 No 1 K. 478  
ベートーヴェン ピアノ四重奏曲 Op16  
共演 瀬川祥子 (Vn) 田原綾子 (Va) 富岡廉太郎 (Vc)  
【新宿住友ビル 7F 朝日カルチャーセンター13:00】  
お問合せ 朝日カルチャーセンター (TEL 03-3344-1945)

9 月

- 12日(金) 深沢亮子 ウィーンの音楽家と共に  
共演: C エーレンフェルナー (vn) H. ミュラー (va) 他  
【浜離宮朝日ホール 19:00 問い合わせ新演奏家 (03-3561-5012)】
- 13日(土) 北川暁子 ピアノリサイタル～オールショパンプログラム～第2夜  
幻想曲 Op. 49 プレリュード Op. 28 舟歌 Op. 60 他  
【東京オペラシテリサイタルホール 19:00 一般 5,000円 学生 3,000円  
3夜連続券 12,000円(サウンドギャラリーのみ取扱い)】
- 23日(火) 深沢亮子 千葉コンクール本選審査
- 25日(木) CMDJ2014 オペラコンサート【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

10 月

- 4日(土) 深沢亮子リサイタル【主催平田市文化会館 プラタナスホール 18:00】  
ベートーヴェン・モーツァルト・原田稔・ショパンの作品
- 11日(土) 深沢亮子 公開レッスン 【瑞浪市 ホワイトスクエア 15:00】
- 12日(日) 深沢亮子コンサート【ホワイトスクエア 14:00 お問合せ: 0572-68-3143】
- 23日(木) 20世紀以降の音楽とその潮流 “様々な音の風景 XI”  
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】
- 26日(日) 高橋雅光: (公社) 日本尺八連盟主催「尺八オーデション」審査委員。  
京都市男女共同参画センターホール (ウイングス京都)

11 月

- 15日(土) 第28回ピアノ部会公演【原宿アコスタディオにて午後開催(詳細未定)】  
出演者募集中。問い合わせ実行委員新井知子まで
- 21日(金) 「エレクトーン・オケによるコンチェルトの夕べ」  
【渋谷・ヤマハ・エレクトーンシティ 19:00】
- 25日(火) 深沢亮子 ベートーヴェン ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No 8  
シューマン ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No 1 共演 伊藤 維  
【新宿住友ビル 7F 朝日カルチャーセンター 13:00】  
問合せ 朝日カルチャーセンター 03-3344-1945】

12月

- 5日(金) 深沢亮子と室内楽の仲間達【音楽の友ホール 19:00開演】  
深沢亮子(pf) 恵藤久美子(vn) 中村静香(va) 安田謙一郎(vc)  
助川敏弥 ピアノ三重奏曲 (2011年:初演) (pf、vn、vc)  
シューベルト アルペジオーネソナタ (va、pf)  
モーツァルト ピアノ4重奏曲第一番 (pf、vn、va、vc)
- 14日(日) 高橋雅光:尺八3重奏曲「絆」新作委嘱初演。  
(公社)日本尺八連盟広島支部主催「全国演奏大会広島」  
【広島上野学園大ホール 13時開演 ¥3,000】
- 20日(土)北川暁子ピアノリサイタル〜オールショパンプログラム〜第3夜  
幻想ポロネーズOp,61 スケルツォ第4番Op,54 2つのノクターンOp,62他  
【東京オペラシテリサイタルホール19:00 一般5,000円 学生3,000円  
3夜連続券12,000円(サウンドギャラリーのみ取扱い)】

2015年

1月

- 16日(金) 声楽部会公演 「2015年新春に歌う〜夢と希望と、そして・・・」  
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

3月

- 5日(木)邦楽部会第2回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

4月

- 10日(金)フレッシュコンサート2015【すみだトリフォニー小ホール詳細企画】

5月

- 14日(木)作曲部会公演【すみだトリフォニー小ホール詳細企画】  
16日(土)深沢亮子コンサート 演奏とお話(曲目未定)  
【14:30開演 お問合せ 東金文化会館小ホール(Tel 0475-55-6211)】

6月

- 14日(日)日本音楽舞踊会議CMDJ 50周年記念公演  
【上野文化会館小ホール詳細企画】

会員スケジュールの表示(凡例)について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催(含む、各部会主催)公演予定です。  
明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

## 2. 新入会員ごあいさつ

武居 美和子 (正会員 ピアノ)



この度は入会をご許可下さり、どうも有難うございました。

私は、武蔵野音楽大学器楽学部ピアノ専攻を卒業後、ピアノ教室で後進の指導に当たる傍ら、有志によるガラコンサートやリサイタルを行ってきました。また、施設での慰問コンサートや、地域の方々にクラシック音楽に親しんで頂く為のコンサート活動に参加してまいりました。

その活動の中で、ピアノソロだけでなく、学生時代にはチャンスがなかった様々な楽器とのアンサンブルや、伴奏をさせて頂く機会を得ました。その時に、管楽器や弦楽器、声楽の息つかいや曲のアレンジをととても面白く感じ、興味を持ちました。しかし家庭を持ち、子育てに時間を取られた時期には目の前の本番にとりあえず間に合わせる事が精いっぱい、とても満足いく仕上がりにはなりません。自分の時間が取り易くなった今、経験して来たことを見直し、深めてさらに少しでも前進することが出来たら、と思います。そのためにもピアノ部会の方々をはじめ、出来るだけ広く様々の分野の方のご活躍を身近に感じ、お話を伺うことが大切だと思います。そうする事で音楽的な視野が広がり、きつといままで見えていなかった世界に気が付くことが出来るのではないかと期待しております。

本当の意味で音楽がわかるといえるまでには遠い道のりだと思いますが、知る喜びを楽しみつつ頑張りたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

～初心者から専門家までの総合音楽院～

### 八王子音楽院

院長 広瀬美紀子

〒192-0046 八王子市明神町2-23-10

TEL:042-656-0312 FAX:042-656-2395

E-mail yasashiku12@yahoo.co.jp

URL <http://www.hachiouji-music.com>

### ★★開講コース★★

こどものリトミック	ピアノ	ヴァイオリン チェロ・ビオラ	フルート クラリネット	オーボエ ファゴット
声楽 コーラス	ミュージカル 弾き語り	エレクトーン 作曲・アレンジ	ソルフェージュ	トランペット サクソ
クラシック ギター	ポピュラ部門 ジャズ部門	【ピアノ、ボーカル、 ドラム、ギター、ベース】		打楽器 (ボンゴ・マリンバ)
DTM (DTP・録音・ミキジク)	トロンボーン ハーモニカ	音大受験指導		ウッドベース (コントラバス)

## 編集後記

月日はどんどん巡り、もう梅雨を迎える時期となりました。私のような年配者になると月日が経過する速度について行けなくなり、まだまだやっておかなければならない仕事が山ほど残っているのに、己の人生は間もなく終わってしまうのかという思いに駆られ、寂しくなるとともに、焦りを感じます。

しかし、年配者だけでなく、今の時代は若い人から、大人までが、何かに追われ、焦っているように見えます。先日、久しぶりに母校の研究室で後輩の教員仲間たちに会いましたが、とても忙しそうで、ゆっくり会話を交わす時間もありませんでした。STAP細胞の研究で問題を起こしたOさんにも、研究所のメンバーにも、その根底に早く成果を上げなければ、という焦りがあったのかもしれませんが、しかし、このような時代こそ、焦らず、じっくり自分を見つめ直し、自分を見失わないようにつとめる必要があるのではないのでしょうか。芸術活動も、言論活動も成果を上げるまでには時間がかかりますが、焦らず、自分を見失わず、歩んで行きたいものと思います。（編集長：中島洋一）

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アケセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光

戸引小夜子 北條直彦

### 音楽の世界 6月号(通巻 559号)

2014年6月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax: (03) 3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03) 3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04) 7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします